

南中丸下高井遺跡

(遺跡範囲確認調査・第2・3次調査)

海老沼遺跡 (第2次調査)

真福寺貝塚 (K地点・平成29年度調査)

2019

さいたま市教育委員会

南中丸下高井遺跡



(1) H-4号住居跡（古墳時代前期）完掘状況



(2) J-25号住居跡出土埋甕



(3) J-25号住居跡埋甕出土状況



(4) 第2次調査地点出土赤彩土器

南中丸下高井遺跡

(遺跡範囲確認調査・第2・3次調査)

海老沼遺跡 (第2次調査)

真福寺貝塚 (K地点・平成29年度調査)

2019

さいたま市教育委員会

例　　言

- 本書は、埼玉県さいたま市に所在する埋蔵文化財の調査結果を報告する『さいたま市内遺跡発掘調査報告書』の第18集である。
- 収録した調査は、3遺跡における4件の発掘調査及び1遺跡における1件の遺跡範囲確認調査である。これらは、発掘調査については個人住宅建設に伴う埋蔵文化財記録保存及び史跡整備を目的として、平成21～23年度及び平成28～29年度にさいたま市教育委員会が実施したもの一部である。また遺跡範囲確認調査については、宅地造成工事に先立つ遺跡範囲の確認及び部分的な記録保存を目的として、平成12年度に旧大宮市教育委員会が実施したもの一部である。
- 発掘調査の実施及び出土品整理の一部にあたり、国庫補助金の交付を受けた。
- 収録した発掘調査は次のとおりである。

遺跡名	県遺跡番号	調査期間	調査担当者	本書収録部
南中丸下高井遺跡 (遺跡範囲確認調査)	12-067	平成13年1月16日～1月19日	澤柳秀美・雨宮正人	第1部
南中丸下高井遺跡(第2次調査)	12-067	平成22年3月1日～3月26日	中村誠二・青木文彦 ・松本裕之	第1部
南中丸下高井遺跡(第3次調査)	12-067	平成22年4月19日～5月21日	青木文彦・澤柳秀美	第1部
海老沼遺跡(第2次調査)	12-064	平成22年6月18日～7月22日	澤柳秀美・閑根俊雄	第2部
真福寺貝塚 (K地点・平成29年度調査)	77-064	平成29年6月28日～12月26日	吉岡卓真・橋本玲未 ・永瀬史人	第3部

- 収録した遺跡範囲確認調査・発掘調査に係る届出・通知等の法的手続きの概要是次の通りである。
なお、②及び③の通知の通知者は、いずれもさいたま市教育委員会教育長である。

(1) 南中丸下高井遺跡(遺跡範囲確認調査)

① 遺跡範囲確認調査実施依頼

提出年月日：平成12年12月15日 受理年月日・番号：平成12年12月15日付指文第288号

(2) 南中丸下高井遺跡(第2次調査)

① 文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日：平成22年1月15日 受理年月日・番号：平成22年1月15日付教生文第3196号

② 上記届出に対する指示通知

通知年月日・番号：平成22年2月15日付教生文第3517号

③ 文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知年月日・番号：平成22年3月1日付教生文第3639号

(3) 南中丸下高井遺跡(第3次調査)

① 文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日：平成22年4月8日 受理年月日・番号：平成22年4月8日付教生文第109号

② 上記届出に対する指示通知

通知年月日・番号：平成22年4月13日付教生文第132号

③ 文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知年月日・番号：平成22年4月19日付教生文第170号

(4) 海老沼遺跡(第2次調査)

① 文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日：平成23年4月7日 受理年月日・番号：平成23年4月7日付教生文第79号

②上記届出に対する指示通知 通知年月日・番号：平成23年5月2日付教生文第227号
③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知 通知年月日・番号：平成23年5月10日付教生文第345号

(5) 真福寺貝塚（K地点）

①文化財保護法第99条に基づく現状変更の申請

申請年月日：平成29年3月29日付教生文第4403号

許可年月日・番号：平成29年4月21日付28受庁財第4号の2239

②文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知年月日・番号：平成29年6月22日付教生文第990号

6 この調査による遺物および遺構図、写真等の資料はさいたま市教育委員会が保管している。

7 本書の執筆は、次のとおりに分担した。

第1部（遺構）：橋本玲未（さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係 主任）

第1部（遺物）：永瀬史人（さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係 主任）

第2部 : 鈴木久雄（さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係 主査）

第3部 : 吉岡卓真（さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係 主任）

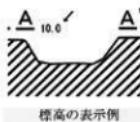
8 南中丸下高井遺跡出土石器の石材については、戸鹿野宏道氏（さいたま市青少年宇宙科学館）に鑑定いただいた。同遺跡出土土器・石器については、笹森紀己子氏（さいたま市史編纂委員）より御教示を賜った。

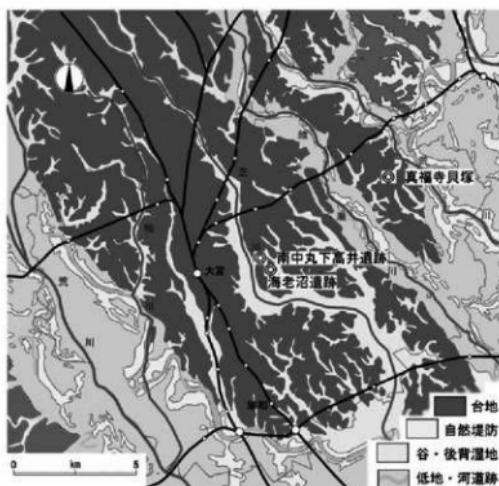
凡　　例

1 遺構断面図における水準は、右図例（矢印部分）のように示した。数値はすべて標高を示し、単位はmである。

2 遺構図における方位は磁北を表している。

3 各部「発掘調査の位置」図中の遺跡範囲は、平成30年3月末日現在のものである。





第1図 掲載遺跡の位置

目 次

例言	(4)	1 住居跡出土遺物	21
凡例	(5)	2 土坑出土遺物	28
目次	(6)	3 遺構外出土遺物	29
第Ⅰ部 南中丸下高井遺跡（遺跡範囲確認 調査・第2・3次調査）					
第Ⅰ章 調査の契機と経過	1	第1節 遺構	32
第1節 調査の契機	1	1 住居跡	32
第2節 調査の方法と経過	2	2 土 坑	35
第Ⅱ章 遺跡の概要	3	第2節 遺物	36
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	1 住居跡出土遺物	36
第2節 調査区の概要	5	2 土坑出土遺物	38
第Ⅲ章 確認調査の遺構と遺物	7	3 遺構外出土遺物	38
第1節 遺構	7	第VI章まとめ	41
1 H-4号住居跡	7	第2部 海老沼遺跡（第2次調査）		
2 土坑	9	第Ⅰ章 調査の契機と経過	43
第2節 遺物	9	第1節 調査の契機	43
1 H-4号住居跡出土遺物	9	第2節 調査の方法と経過	44
2 遺構外出土遺物	15	第Ⅱ章 遺跡の概要	44
第IV章 第2次調査の遺構と遺物	15	第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	44
第1節 遺構	15	第2節 調査区の概要	45
1 住居跡	15	第III章 遺構と遺物	47
2 土 坑	18	第1節 第2面検出の遺構と遺物	48
3 ピット	21	1 土坑	48
第2節 遺物	21	2 ピット	49
			第2節 第1面検出の遺構と遺物	49

1	第1号住居跡	49	2	遺構外出土遺物	54
2	第1号住居跡出土遺物	50			
3	第1号土坑	52	第3部 真福寺貝塚（K地点・平成29年度調査）		
4	第1号溝	52	1	調査の目的	55
5	第1号溝出土遺物	53	2	平成29年度調査の概要	55
第3節 その他の遺物				写真図版	
1	包含層出土遺物	53		報告書抄録	

挿図目次

第1図	掲載遺跡の位置	(6)	第21図	J-28・J-29号住居跡	35
南中丸下高井遺跡			第22図	第3次調査土坑	36
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡	4	第23図	第3次調査出土土器・石器・土製品	39
第3図	調査区の位置	5	海老沼遺跡		
第4図	確認調査全測図及びH-4号住居跡	8	第24図	遺跡の位置	43
第5図	確認調査土坑	9	第25図	発掘調査の位置図	45
第6図	H-4号住居跡出土土器（1）	10	第26図	調査区の位置図	46
第7図	H-4号住居跡出土土器（2）・石器	11	第27図	全測図及び全土層図	47
第8図	H-4号住居跡・遺構外出土石器	14	第28図	第2面検出の遺構	48
第9図	第2次調査全測図及び全土層図	16	第29図	土坑	48
第10図	J-23号住居跡	17	第30図	第1面検出の遺構	49
第11図	J-24号住居跡	18	第31図	第1号住居跡	50
第12図	J-25号住居跡	19	第32図	第1号住居跡出土遺物	51
第13図	第2次調査土坑	20	第33図	第1号土坑	52
第14図	第2次調査ピット群	21	第34図	第1号溝	52
第15図	J-23号住居跡出土土器（1）	24	第35図	第1号溝出土遺物	53
第16図	J-23号住居跡出土土器（2）	25	第36図	包含層出土遺物	53
第17図	J-24号・J-25号住居跡・土坑・遺構外出土土器	30	第37図	遺構外出土遺物	54
第18図	第2次調査出土石器・土製品・石製品	31	真福寺貝塚（K地盤）		
第19図	第3次調査全測図及び全土層図	33	第38図	調査区の位置	55
第20図	J-26・J-27号住居跡	34	第39図	Aライン北壁土層模式図	56

表・グラフ目次

南中丸下高井遺跡

第1表	遺跡範囲確認調査出土遺物集計表	6	第12表	J-24号住居跡出土土器時期別集計表	28
第2表	第2次調査出土遺物集計表	6	第13表	土坑出土土器時期別集計表	29
第3表	第3次調査出土遺物集計表	7	第14表	第2次調査出土石器一覧表	29
第4表	H-4号住居跡内ピット計測表	7	第15表	J-26・J-27号住居跡ピット計測表	32
第5表	遺跡範囲確認調査出土土器一覧表	15	第16表	J-28号住居跡ピット計測表	34
第6表	J-23号住居跡内ピット計測表	16	第17表	J-29号住居跡ピット計測表	34
第7表	J-24号住居跡内ピット計測表	16	第18表	第3次調査暨穴住居跡出土土器時期別集計表	37
第8表	J-25号住居跡内ピット計測表	18	第19表	第3次調査土坑・ピット出土土器時期別集計表	38
第9表	第2次調査ピット計測表	21	第20表	ピット計測表	49
第10表	J-23号住居跡出土土器時期別集計表	25	第21表	第1号住居跡内ピット計測表	52
第11表	J-24号住居跡出土土器時期別集計表	27			

図版目次

口絵 南中丸下高井遺跡

(1) H-4号住居跡（古墳時代前期）完掘状況 (2) J-25号住居跡出土埋甕 (3) J-25号住居跡埋甕出土状況 (4) 第2次調査地点出土赤彩土器

図版1 南中丸下高井遺跡（遺跡範囲確認調査）

(1) H-4号住居跡完掘状況 (2) 調査風景 (3) H-4号住居跡炭化材出土状況 (4) H-4号住居跡遺物出土状況（東→） (5) H-4号住居跡遺物出土状況（南→）

図版2 南中丸下高井遺跡（第2次調査）

(1) 第2次調査地点完掘状況 (2) 調査風景 (3) J-23号住居跡完掘 (4) J-23号住居跡覆土堆積状況 (5) J-23号住居跡遺物出土状況①

図版3 南中丸下高井遺跡（第2次調査）

(6) J-23号住居跡遺物出土状況② (7) J-23号住居跡遺物出土状況③ (8) J-23号住居跡炉内出土土器 (9) J-23号住居跡炉検出状況 (10) J-24号住居跡完掘 (11) J-25号住居跡完掘 (12) J-25号住居跡埋甕（上面→） (13) J-25号住居跡埋甕（南西→）

図版4 南中丸下高井遺跡（第3次調査）

(1) 第3次調査地点A区完掘 (2) J-26号住居跡・J-27号住居跡 (3) J-27号住居跡 (4) 第3次調査地点B区完掘 (5) 調査風景 (6) J-28号住居跡 (7) J-28号住居跡・J-29号住居跡 (8) J-29号住居跡内ピット1

図版5 南中丸下高井遺跡（遺跡範囲確認調査）

(1) H-4号住居跡出土土器 (1) (第6図1~10、第7図11~26)

図版6 南中丸下高井遺跡（遺跡範囲確認調査）

(2) H-4号住居跡出土土器 (2) ・石器、遺構外出土石器 (第7図27~37、第8図38~45)

図版7 南中丸下高井遺跡（第2次調査）

(1) J-23号住居跡出土土器 (1) (第15図1~15、第16図16~18)

図版8 南中丸下高井遺跡（第2次調査）

(2) J-23号住居跡出土土器 (2) ・J-24号・J-25号住居跡出土土器 (第16図19~28、第17図1~20)

図版9 南中丸下高井遺跡（第2・3次調査）

(1) 第2次調査出土石器・土製品・石製品、第3次調査出土土器・石器・石製品 (第18図1~13、第23図1~27)

図版10 海老沼遺跡（第2次調査）

(1) 1区全景 (2) 2区全景

図版11 海老沼遺跡（第2次調査）

(1) 調査状況 (2) 第1号住居跡 (3) 第1号住居跡出土土器 (4) 第1号住居跡の炉跡 (5) 第1号土坑 (6) 第3号土坑

図版12 海老沼遺跡（第2次調査）

(1) 1号住居跡出土遺物 (第33図1~11)

図版13 海老沼遺跡（第2次調査）

(2) 1号住居跡出土遺物 (第33図12~21)

図版14 海老沼遺跡（第2次調査）

（3）遺構外遺物（第38図33～36）

図版15 真福寺貝塚（K地点・平成29年度調査）

（1）調査区全景（東から）（2）平安住居遺物出土状況（西から）（3）平安住居完掘状況（西から）

図版16 真福寺貝塚（K地点・平成29年度調査）

（4）平安住居カマド付近遺物出土状況（西から）（5）平安住居西壁遺物出土状況（東から）（6）
窪地内調査区西壁（東から）（7）窪地内調査区東壁（西から）（8）窪地内遺物検出状況（東か
ら）（9）窪地内遺物出土状況（南から）

図版17 真福寺貝塚（K地点・平成29年度調査）

（10）窪地内遺物出土状況（南西から）（11）窪地内遺物出土状況（北東から）（12）窪地内墓壙検
出状況（南から）（13）窪地内墓壙検出状況（西から）（14）高まり西側裾部調査区東壁（西から）
（15）高まり西側裾部晚期土坑（西から）

図版18 真福寺貝塚（K地点・平成29年度調査）

（16）高まり内ビット内貝層（北から）（17）高まり内マガキ貝層（南西から）（18）高まり内貝層
遺物出土状況（北から）（19）高まり内ヤマトシジミ貝層（南から）（20）高まり東側遺構検出（西
から）（21）東大地点小学生体験発掘（北西から）

第1部

南中丸下高井遺跡

(遺跡範囲確認調査・第2・3次調査)

第I章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

(遺跡範囲確認調査)

平成12年（2000）12月、南中丸下高井遺跡の範囲内の、大宮市大字南中丸字下高井（当時）における宅地造成計画に伴い、工事主体者より大宮市教育委員会に宛て、遺跡範囲確認調査依頼書が提出された。これを承け、平成12年12月19日に大宮市教育委員会が確認調査を実施したところ、縄文時代中期及び古墳時代初頭の遺構・遺物の所在が確認された。ただちに遺跡の保存についての協議を行ったところ、計画地の大半は盛土により遺跡の現状保存が可能であるが、一部に十分な保護層が確保できない箇所があり、計画の変更も困難であるとのことであった。この箇所については、先に実施した確認調査の結果では埋蔵文化財の有無や範囲が不明確であったため、再度遺跡範囲確認調査を実施し、遺構・遺物が確認された場合はその場で記録保存の措置を取ることとなった。遺跡範囲確認調査は大宮市教育委員会が実施した。

遺跡範囲確認調査依頼の年月日及び受理年月日は、例言5（p.（1））のとおりである。

(第2次調査)

平成22年（2010）1月、南中丸下高井遺跡の範囲内のさいたま市見沼区大字南中丸字下高井における個人専用住宅建設設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを承け、平成22年2月12日にさいたま市教育委員会が確認調査を実施したところ、縄文時代前期の住居跡などの遺構・遺物の所在が確認された。ただちに遺跡の保存についての協議を行つたが、今回の工事計画では、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

埋蔵文化財発掘の届出の届出年月日及び受理年月日、届出に対する指示通知年月日、発掘調査の通知年月日は、例言5（p.（1））のとおりである。

(第3次調査)

平成22年（2010）4月、南中丸下高井遺跡の範囲内のさいたま市見沼区大字南中丸字下高井における個人専用住宅建設設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が

南中丸下高井遺跡

提出された。当該の土地は、土地所有者の依頼により、届出提出前の平成22年2月12日に確認調査を実施し、縄文時代前期の住居跡などの遺構・遺物の所在が確認されていたことから、ただちに遺跡の保存についての協議を行ったが、今回の工事計画では、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

埋蔵文化財発掘の届出の届出年月日及び受理年月日、届出に対する指示通知年月日、発掘調査の通知年月日は、例言5（p.（1））のとおりである。

第2節 調査の方法と経過

（遺跡範囲確認調査）

遺跡範囲確認調査は、平成13年1月16日から1月19日にかけて実施した。調査の範囲は、造成工事により十分な保護層が確保されず、遺跡の現状保存が不可能な部分である。まずトレンチ状に表土の掘削を行い、遺構が確認された箇所についてはトレンチを拡張して表土の除去を行い、遺構の記録保存を実施した。

1月16日に調査機材を現地に搬入し、重機を用いて遺構の確認及び当該部分の表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲確認、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、1月19日に実施した。埋戻しは造成工事計画上不要とのことであったため実施しなかった。その後機材を撤収し、現地における確認調査の作業を終了した。

（第2次調査）

発掘調査は、平成22年3月1日から3月12日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅及び駐車場建設部分である。調査機材はあらかじめ2月25日・26日に搬入を行い、3月1日に重機を用いて表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲確認、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、3月11日に実施した。調査完了後、3月12日に重機を用いて調査区の埋戻しを行い、機材を撤収し、現地における発掘調査の作業を終了した。

（第3次調査）

発掘調査は、平成22年4月19日から5月21日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅建設部分である。4月19日に調査機材を現地に搬入した。調査は排土仮置きの都合上、南側・北側に分け、北側をA区、南側をB区として実施することとした。まずA区について、4月20日に重機を用いて表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲確認、遺構調査を実施した。A区の遺構の測量は平板測量により、5月10日に実施した。A区の調査完了後、5月12日に重機を用いてA区の埋め戻し及びB区の表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲確認、遺構調査を実施した。B区の遺構の測量は平板測量により、5月18日・19日に実施した。調査完了後、5月21日に重機を用いて調査区の埋戻しを行い、機材を撤収し、現地における発掘調査の作業を終了した。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

周知の埋蔵文化財包蔵地である南中丸下高井遺跡（第2図1）は、さいたま市の中央部、見沼区大字南中丸に所在する。JR大宮駅から東に約2.3kmの位置にあり、遺跡の範囲は南北約250m、東西約160mである。遺跡の時代は旧石器時代、縄文時代、古墳時代、平安時代である。

地形上は、大宮台地片柳支台の西端に位置しており、遺跡の西側には見沼低地が広がっている。台地上面のこれらの地域は、近世には屋敷地、屋敷林や畠として利用されており、同様の土地利用は近代に至るまで継続している。高度経済成長期以降は都市計画において市街化区域とされ、昭和50年代から住宅の建設が増加し、市街地化が進んでいる。

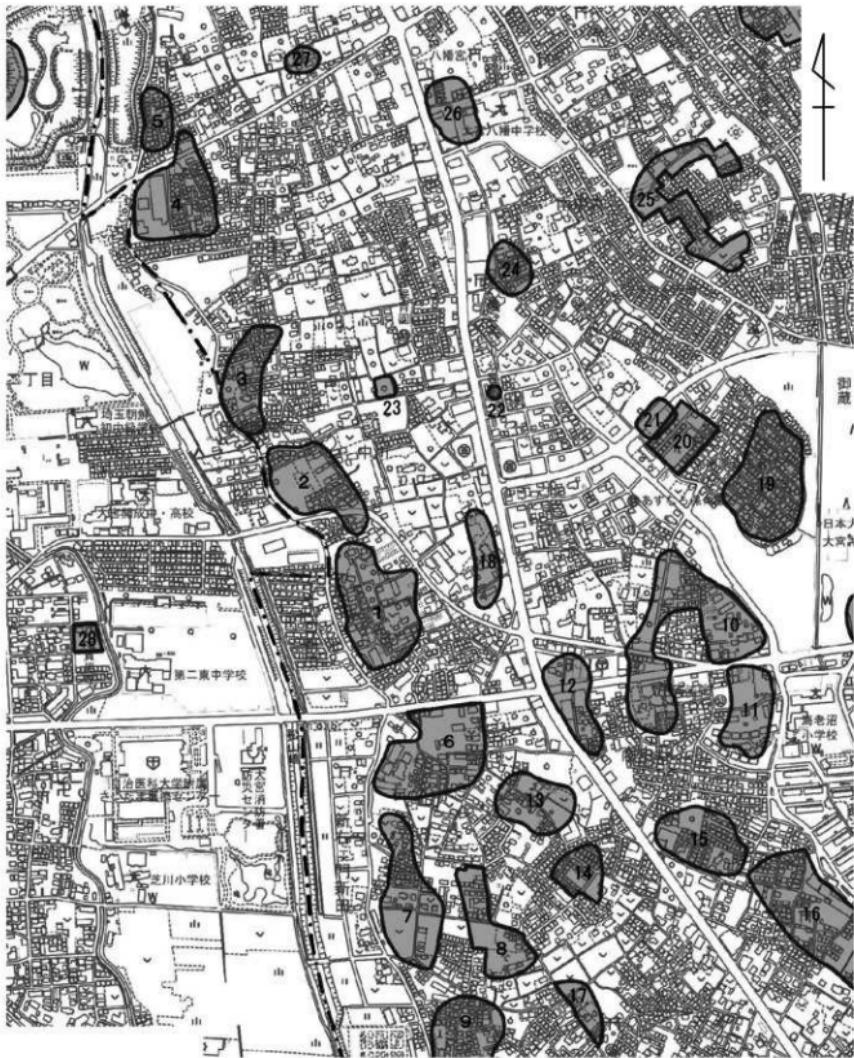
南中丸下高井遺跡の北側と南側には、片柳支台の西縁に沿って遺跡が連続している。北側にはA-68号遺跡、A-69号遺跡、大和田光明遺跡、高井遺跡が、南側には中川貝塚、A-59号遺跡、A-58号遺跡、中川八幡遺跡などが立地する。いずれも縄文時代を含む遺跡であり、過去の調査においてはA-69号遺跡で縄文時代後期の住居跡8基、大和田光明遺跡で縄文時代中期の住居跡1基、中川貝塚で縄文時代前期の住居跡3基などが確認されている。大和田光明遺跡では古墳時代の住居跡2基も確認されている。また、遺跡の南東側約500m付近まで、片柳支台の南側から支谷が入り込んでおり、この支谷の周囲の台地上には海老沼遺跡、海老沼南遺跡、A-65号遺跡、A-189号遺跡、南中野西浦遺跡、南中野諏訪遺跡、南中野諏訪北遺跡などの遺跡が立地している。海老沼遺跡では縄文時代中～後期の住居跡2基、平安時代の住居跡2基、海老沼南遺跡では弥生時代の住居跡1基、平安時代の住居跡3基、南中野西浦遺跡では縄文時代の前期から後期にかけての住居跡20基などが確認されている。南中野諏訪北遺跡では、4次にわたる発掘調査において30基以上の弥生時代の住居跡が確認されている。

南中丸下高井遺跡内の標高は台地上の平坦面でおよそ16～17mであり、見沼低地（標高5m前後）との間には10m以上の比高差がある。遺跡の南側と北側にはそれぞれ見沼低地から小支谷が入り込んでおり、東側のみ支台の中心部に続いている。片柳支台は西縁で標高が高く、中央部分は標高12～13m程度とやや低いため、遺跡の東側は東に向かってわずかに傾斜している。

遺跡内ではこれまでに、開発に伴う発掘調査が、旧大宮市遺跡調査会及びさいたま市教育委員会によって4地点で行われている。第1次調査は、大宮市遺跡調査会により昭和61年（1986）11月17日から昭和62年（1987）2月14日にかけて実施され、縄文時代前期～中期の住居跡22基、古墳時代の住居跡2基、平安時代の住居跡1基が確認されている（※1）。第2次調査・第3次調査については本報告に記す。第4次調査は未報告であるが、さいたま市教育委員会により平成22年（2010）5月31日から6月28日にかけて実施され、縄文時代の住居跡7基が確認されている。また、遺跡範囲確認調査により遺跡の所在が確認され、現状保存されている地点が、第1次調査地点と第2次調査地点の間に4地点所在する。いずれも縄文時代の構造や遺物が確認されている。このほか、遺跡範囲確認調査の際に記録保存の措置とした地点が1地点所在する。この内容についても本報告に記す。

※1：大宮市遺跡調査会報告第23集『南中丸下高井遺跡』大宮市遺跡調査会（1988）。

南中丸下高井遺跡



- 1 : 南中丸下高井遺跡 2 : A-68号遺跡 3 : A-69号遺跡 4 : 大和田光明遺跡 5 : 高井遺跡 6 : 中川貝塚 7 : A-59号遺跡 8 : A-58号遺跡 9 : 中川八幡遺跡 10 : 海老沼遺跡 11 : 海老沼南遺跡 12 : A-65号遺跡 13 : A-189号遺跡 14 : 南中野西浦遺跡 15 : 南中野源防北遺跡 16 : 南中野源防北遺跡 17 : A-187号遺跡 18 : A-66号遺跡 19 : 南中丸遺跡 20 : 春日氏館跡 21 : 南中丸台遺跡 22 : A-72号遺跡 23 : A-190号遺跡 24 : A-71号遺跡 25 : A-76号遺跡 26 : A-70号遺跡 27 : A-210号遺跡 28 : 実相寺遺跡

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡（縮尺1/10000）

第2節 調査区の概要

1 各調査における遺構概要

(遺跡範囲確認調査)

遺跡範囲確認調査で表土の除去を行い、遺跡の記録保存を行った面積は約30.7m²である。遺構確認面はソフトローム層上面で、調査時の地表面からの深さは約25~40cmであった。

検出された遺構は古墳時代前期の竪穴住居跡1基である。住居跡の全体が、現状保存不可能な範囲に位置していたため、記録保存を行った。遺物は、住居跡から多量の炭化材と共に、古墳時代の壺形土器や台付甕形土器、小型壺形土器などが出土した。

なお、本遺跡の遺構の呼称については、第1次調査の報告において、縄文時代の住居跡を「J-1号住居跡」から、古墳時代～平安時代の住居跡を「H-1号住居跡」からそれぞれ連番で呼称しており、本報告書でもこれに従うこととし、本調査で確認された住居跡は「H-4号住居跡」と呼称する。

(第2次調査)

第2次調査の調査面積は約70m²である。遺構確認面はソフトローム層上面で、調査時の地表面からの深さは約30cmであった。検出された遺構は縄文時代中期の竪穴住居跡3基、土坑15基、弥生時代以降のピット4基である。住居跡は調査区の中央付近、南西隅、南東隅でそれぞれ検出された。「J-23号～25号住居跡」と呼称する。中央付近のJ-23号住居跡は、東側の一部が調査区外に位置しており、また遺構の中央付近に擾乱が及んでいるため全体を把握することはできなかつたが、南北方向に長軸を持つ、長径約4.6mの長円形のプランを持つと思われる。住居跡床面の中央付近に位置する炉跡は、東側を擾乱で破壊されていたが、炉体土器の一部が検出された。南西隅のJ-24号住居跡、南東隅のJ-25号住居跡は推定される規模の半分以上が調査区外に位置しており、今回の調査では規模を把握できなかつた。J-25号住居跡では、床面で埋甕が検出された。

(第3次調査)

第3次調査の調査面積は約48m²である。遺構確認面はソフトローム層上面で、調査時の地表面からの深さは約30cmであった。

検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡4基、土坑3基である。住居跡は調査区の北側で2基、南側で2基検出された。それぞれ「J-26・27号住居跡」、「J-28・



第3図 調査区の位置 (縮尺1/2000)

南中丸下高井遺跡

29号住居跡」と呼称する。いずれの住居跡も調査区外へ続いており、また擾乱が及んでいる部分もあるため、今回の調査では規模を確定することはできなかった。

2 各調査における出土遺物概要

遺跡範囲確認調査では、竪穴住居跡1軒、土坑3基、遺構外から、18入り遺物収納容器4箱分、約30kgもの土器、石器、礫などが検出された（第1表）。竪穴住居跡からは、この内20kg程の遺物が検出され、多量の土器や石器類、礫などが出土している。

第2次調査では、竪穴住居跡3軒、土坑7基、遺構外から、18入り遺物収納容器5箱分、約36kgの土器、石器、土製品、石製品が出土している（第2表）。J-23号住居跡の出土遺物がもっとも多く、18kgにも及ぶ土器や石器のほか、礫も多量に出土した。

第3次調査では、18入り遺物収納容器2箱分、約7kgの土器、石器、土製品、礫が出土した。試掘確認調査、第2次調査と比較してもっとも少ない出土量である。その大半がJ-26号住居跡、及び1号土坑から検出されている（第3表）。

第1表 遺跡範囲確認調査出土遺物集計表

出土遺物	土器	石器	石器	石核・剥片	打製石斧	磨製石斧	石皿	磨石・鏡石	砥石・合石	礫	土製品	石製品	総重量(g)				
遺構名	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点					
H-4号住	16768	1	1	11	1	2	2	340	4		2220	1	906	2	401		20648
1号土坑	325															325	
2号土坑	66															66	
3号土坑	60															60	
遺構外	7916							110	1				180	1	410		8616
合計	25135	1	1	11	1	2	2	450	4		2220	1	1086	3	811		29715

第2表 第2次調査出土遺物集計表

出土遺物	土器	石器	石器	石核・剥片	打製石斧	磨製石斧	石皿	磨石・鏡石	砥石・合石	礫	土製品	石製品	総重量(g)							
遺構名	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点								
J-25号住	18815	793					361	3	85	1	504	4	311	2	200	1	3409	71		23665
J-24号住	675	42															675			
J-25号住	5239	44															5239			
1号土坑	274	7															274			
2号土坑	91	9															91			
5号土坑	546	12															546			
10号土坑	20	1															20			
11号土坑	137	7															137			
12号土坑	184	13															184			
13号土坑	135	16															135			
遺構外	2689	193					86	2	257	2							2689			
合計	26990	1129					447	5	342	3	589	5	540	3	200	1	6562	120		37502

第3表 第3次調査出土遺物集計表

出土遺物	土器		石器		石器		石核・剝片		打削石斧		磨削石斧		石皿		磨石・敲石		研石・台石		礫		土製品		石製品		総重量(g)	
	E	点	E	点	E	点	E	点	E	点	E	点	E	点	E	点	E	点	E	点	E	点	E	点		
J-26号住	619	46																								619
J-27号住	192	14																								192
J-28号住	405	42																								404
J-29号住	821	68																								821
1号土坑	1548	113																								1840
3号土坑	75	6																								75
遺構外	1778	113																								1966
合計	5438	402																								8027

第三章 確認調査の遺構と遺物

第1節 遺構

1 H-4号住居跡（第4図・第4表）

確認調査依頼を受けた土地の西端で検出された住居跡である。平面形状は隅丸方形、主軸はおよそN25°W、長径約4.2m、短径約4.0mを測る。遺存状況は良好で、確認面から床面までの深さは約40cmを測る。覆土は、床面直上に炭化材や炭化物粒子、焼土粒子が多く含む層の堆積があり、その上部は確認面近くまで一様の堆積がみられる。床面の中央からやや長軸方向北よりの箇所に炉跡が検出された。炉跡はややいびつな長円形で、長軸は住居跡の軸線にほぼ沿っており、長径約105cm、短径約85cmを測る。掘り込みの深さは約10cmを測る。炉跡に重なる位置に、ひょうたん型のプランを持つピットが重複しており、ピット部分には焼土は堆積していない。深さは住居跡床面から45~50cmを測る。炉跡のほか、床面の南西寄りに焼土の堆積がみられた。形状はレンズ状で、最大厚は約7cmを測る。

床面からはピットが10基検出された。ピット1、3、7、8、10等の位置関係から、主柱は4本ないしは5本とみられる。住居跡南東壁際には、土手状に盛土で囲まれた深さ36cmのピットがあり、貯蔵穴の可能性がある。寸法等は計測表（第4表）に記す。

住居跡の南西壁際からは、石皿と共に台付甕形土器や小型壺形土器、小型壺形土器などがまとめて検出されている（図版1）。

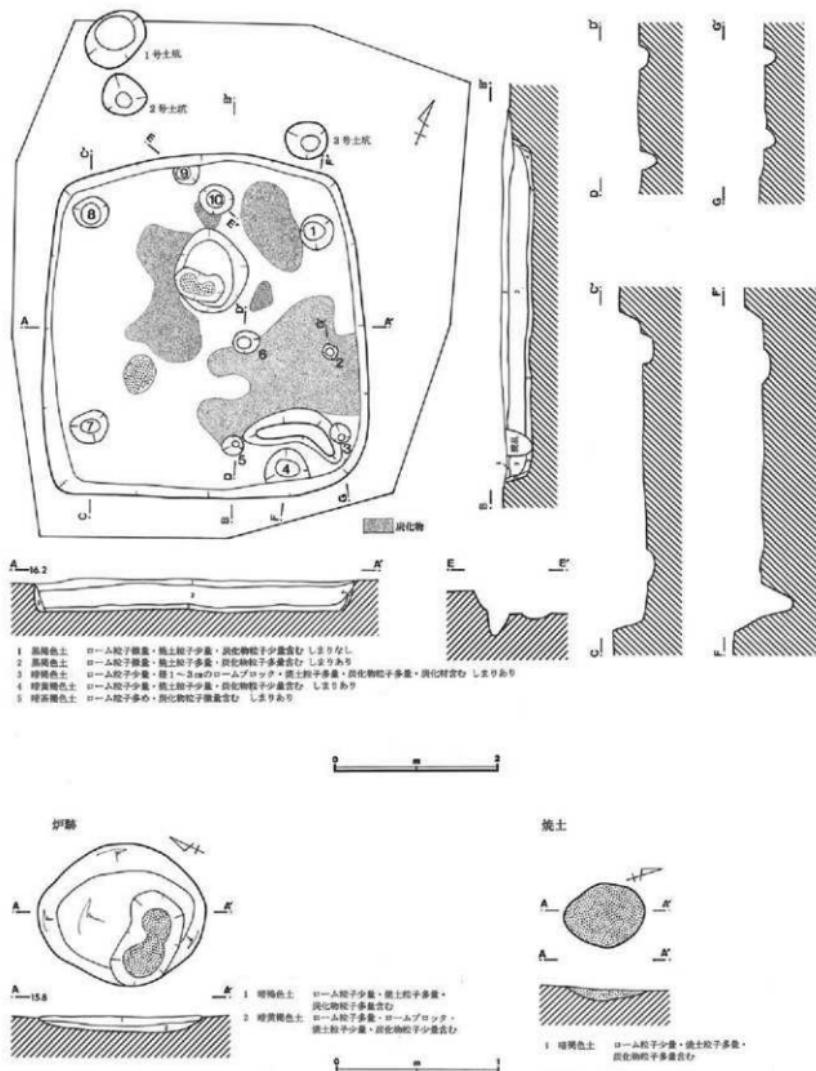
当遺構は、炭化材の分布から焼失したものとみられ、時期は古墳時代前期の五領1式に比定される。

第4表 H-4号住居跡内ピット計測表

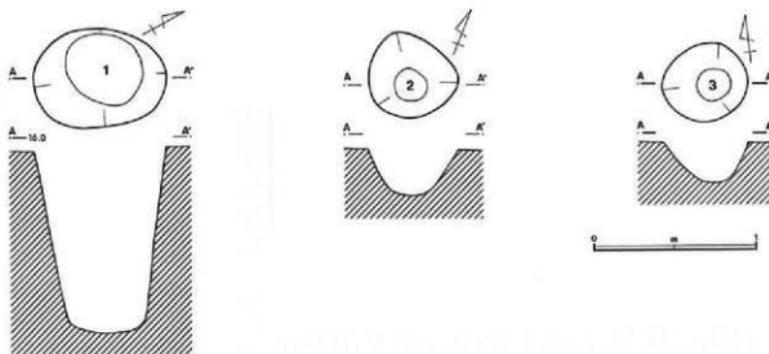
単位：cm () 内は現状での数値 深さは確認面からの深さ

番号	長径	短径	深さ
1	44	42	5
2	20	16	13
3	20	26	10
4	58	(40)	36
5	29	24	18
6	36	30	10
7	45	38	10
8	42	38	11
9	30	(26)	26
10	44	37	6

南中丸下高井遺跡



第4図 確認調査全測図及びH-4号住居跡



第5図 確認調査土坑

2 土坑（第5図）

H-4号住居跡の北側で3基の土坑が検出された。北西側から南東に向けて順に第1号土坑～第3号土坑と呼称する。

第1号土坑は、南北にやや長い長円形のプランを持つ。長径は約80cm、短径は約60cm、確認面から底面までの深さは約110cmを測る。第2号土坑はやや歪んだ円形のプランを持つ。直径は約50cm、確認面から底面までの深さは約60cmを測る。第3号土坑は東西にやや長い長円形のプランを持つ。長径は約50cm、短径は約40cm、確認面から底面までの深さは約50cmを測る。これらの土坑からは縄文土器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

第2節 遺物

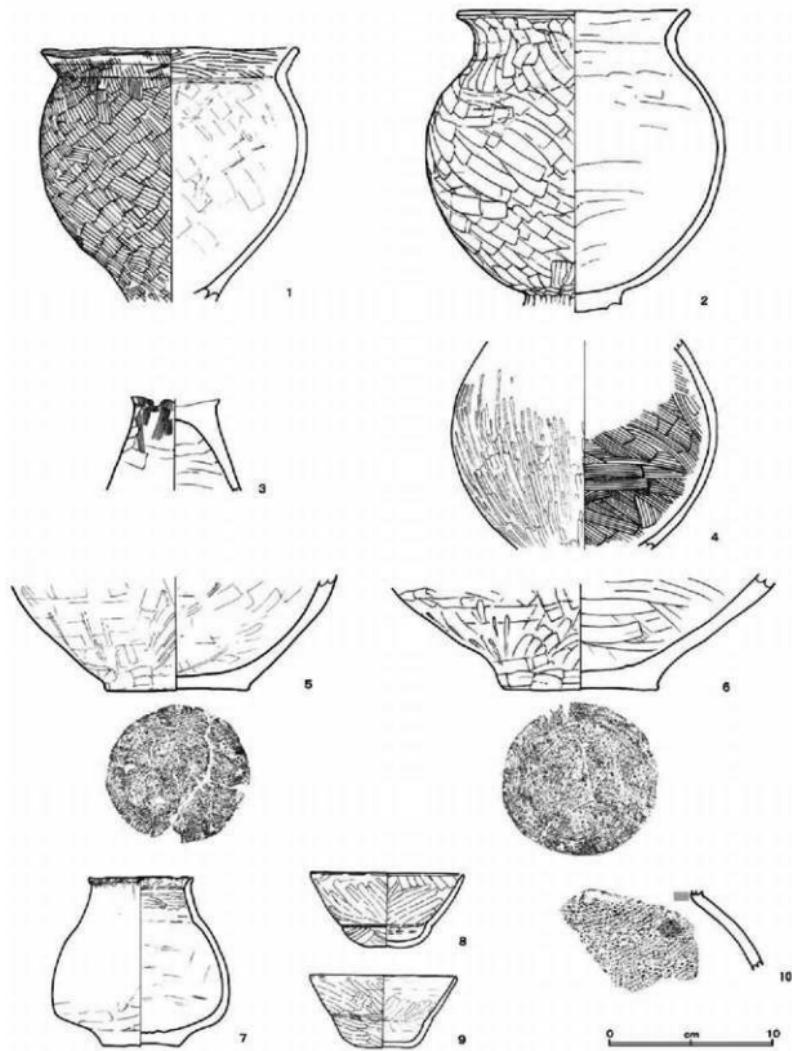
1 H-4号住居跡出土遺物（第6～8図）

土器（第6図1～34）

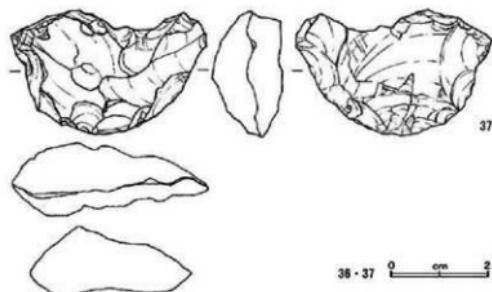
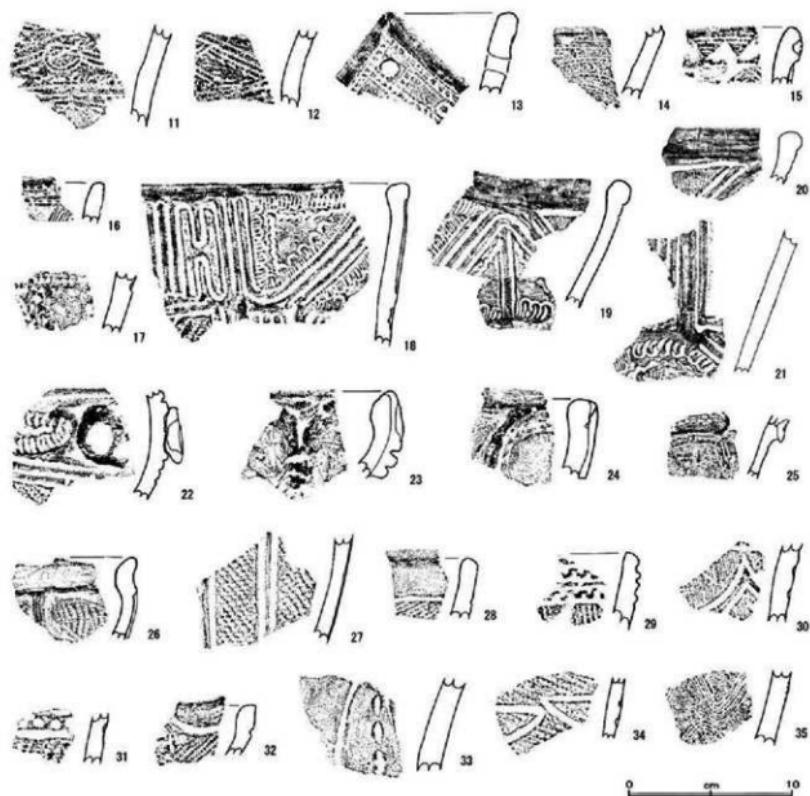
H-4号住居跡は、床面から多数検出された炭化材から焼失したものとみられ、完形や完形に近い土師器や石器がまとまりのある状態で発見された（図版1）。

1は、住居中央北東寄りの床面上で横倒しの状態で検出された台付甕である。脚部は欠失しているが、口縁部から胴部はほぼ完存する。口径は15.8cm、残存高は15.5cmである。器形は、最大径が胴部上半にあり、頭部はくの字に屈曲して外反する。器面は、外面全体にハケメ調整がなされ、胴部内面にはヘラナデ、口縁部内面には横方向のハケメ調整が施されている。色調は茶褐色で、外面の胴部下半には黒斑が認められる。胎土は砂粒を含み、焼成は堅緻である。

2～9は、南西壁際の床面上より石器42と共にまとまった状態で検出された。2は、脚部を欠失した台付甕である。一部、口縁部が失われているが、口縁部から胴部にかけてほぼ完存する。口径は14.2cm、残存高17.7cmである。器形は、最大径が胴部上半にあり、頭部は緩やかに湾曲して外反する。器面は、口縁部内面、及び外面全体にヘラナデ、胴部下端から脚部にかけてハケメ調整が施されて



第6図 H-4号住居跡出土土器（1）



第7図 H-4号住居跡出土土器(2)・石器

いる。色調は茶褐色で胴部外面に黒斑や煤が認められる。胎土は白色の砂粒を多量に含み、焼成は堅緻である。3は、台付甕の脚部である。脚部のほぼ $1/3$ が遺存する。残存高は5.8cmである。器面は、胴部との接合部を中心にハケメ調整が認められ、内面はヘラナデが施されている。色調は茶褐色で焼成は堅緻である。胎土は、微細な白色粒子が多量に含まれている。4は、壺形土器の胴部片である。口縁部、底部は欠失している。推定の胴部最大径は、14.8cmである。器面は、内面、外面全体にハケメ調整が施された後、外面に縱方向のミガキ調整が施されている。器厚は3~4mmと薄手であり、胎土は白色の砂粒を多量に含む。色調は茶褐色で、下半の一部に黒斑が認められる。5・6は大型の壺形土器の底部片である。5・6共に輪積みの接合部で破損し、口縁部から胴部が失われている。5は、底径が8.8cm、残存高は7cmである。器面は内外面共にヘラナデが施され、底面はヘラケズリによって整形されている。色調は茶褐色で一部に黒斑が認められる。胎土は微細な白色の砂粒を含んでいる。6は、2~9とはやや離れた位置で、正立のまま潰れた状態で検出された(図版1)。器面は内面、外面にヘラナデが施された後、外面全体に丁寧なタテミガキ調整が施されている。底面はヘラケズリによって整形されている。底径は9.6cm、残存高は6.5cmである。色調は茶褐色で、外面の1/2に黒斑が認められる。胎土には微細な白色粒子が多量に含まれている。7は、小型の壺形土器の完形品である。石器42に隣接して横倒しの状態で検出された。器形は、最大径が胴部下半にあり、上部に向かって緩やかにそぼまる。頸部は直線的で、口縁部はわずかに外反する。口径は6.4cm、器高は10.3cm、底径は4.6cm、胴部最大径は10.8cmである。器面は、胴部内面にヘラナデ、頸部内面にヘラミガキが施されている。8、9は小型壺形土器である。石器42に接し、正立の状態で2個が並んで検出された。8は口径が9.0cm、器高は4.4cm、底径が3cmである。器面は胴部内外面にヘラミガキ、口縁部にヘラナデが施されている。9は口径が9.4cm、器高が4.5cm、底径が3cmである。器面は胴部内外面にヘラミガキ、口縁部内面には縦方向のヘラケズリが施されている。10は、壺形土器の頸部~肩部片である。外面にはZSの網目状撚糸文が施された後、円形赤彩文が施されている。頸部内面にも赤彩が認められる。器面は内面にヘラナデが施されているが、輪積み痕が顕著に残る。色調は茶褐色で焼成は堅緻である。胎土には微細な砂粒が含まれている。1~10は、いずれも古墳時代前期の五領1式に比定される。

第7図 11~35は、覆土中から出土した縄文土器片である。当住居跡の覆土中からは約17kgの土器が検出されたが(第1表)、この内の約12kgは全て縄文土器であった。その大半は中期の土器片であったが、前期から後期にかけて多様な時期の土器片が認められた。

11・12は、前期初頭の花積下層式に比定される。いずれも二本単位の撚糸側面圧痕文と先の尖った棒状工具による刺突文が施されている。胎土中には微細な白色粒子と繊維が含まれている。色調は明黄褐色である。

13・14は、前期後葉の諸磯a式に比定される。13は、貫通孔をもつ波状口縁の突起部分である。幅4mmの竹管状工具による押引文と幅6mmの円形竹管文が施されている。内面にはミガキ調整が施され、焼成は堅緻、色調は明褐色である。胎土には微細な白色粒子と角閃石が含まれる。14は、内面に屈曲する口縁部片である。単節RL縄文が横位に施された後、幅3mmの半裁竹管による弧線文が施される。焼成は堅緻で色調は橙色である。胎土には結晶片岩とみられる砂粒が認められる。

15・16は前期末葉の十三菩提式である。いずれも直線的な口縁部片で口唇部分はやや面取りされている。15は、口縁部を折返して成形され、幅3mmの平行沈線の施文後、同型式の特徴である三角形の抉り取りが施されている。色調は明褐色、胎土には白色粒子と砂礫が多量に含まれている。16は、幅

2 mmの平行沈線と結節沈線が施文された後、三角形の挟り取りが施されている。

17は、中期初頭の落沢式に比定される胴部片である。隆帯が貼付された後、その脇に角押文が施されている。色調は明褐色、風化のためか器面は粗い。胎土には微細な白色粒子が含まれている。

18~22は中期中葉の勝坂2式（藤内式）に比定される口縁部～胴部片である。18~21はいわゆる「ペネル文土器」の同一個体である。直線的な器形で口唇部は内側に折り返されて肥厚する。器面を割り付ける平行沈線のほか、刺突による蓮華文やキャタピラ文、蛇行沈線文が施されている。色調は暗褐色で焼成は堅緻である。胎土には微細な白色粒子と風化黒雲母が多量に含まれている。22は、円形の突起をもつ胴部片である。単節RL繩文が施された後、半裁竹管による平行沈線、キャタピラ文、蛇行沈線文が施されている。色調は明褐色で、胎土には白色粒子と風化黒雲母が多量に含まれている。

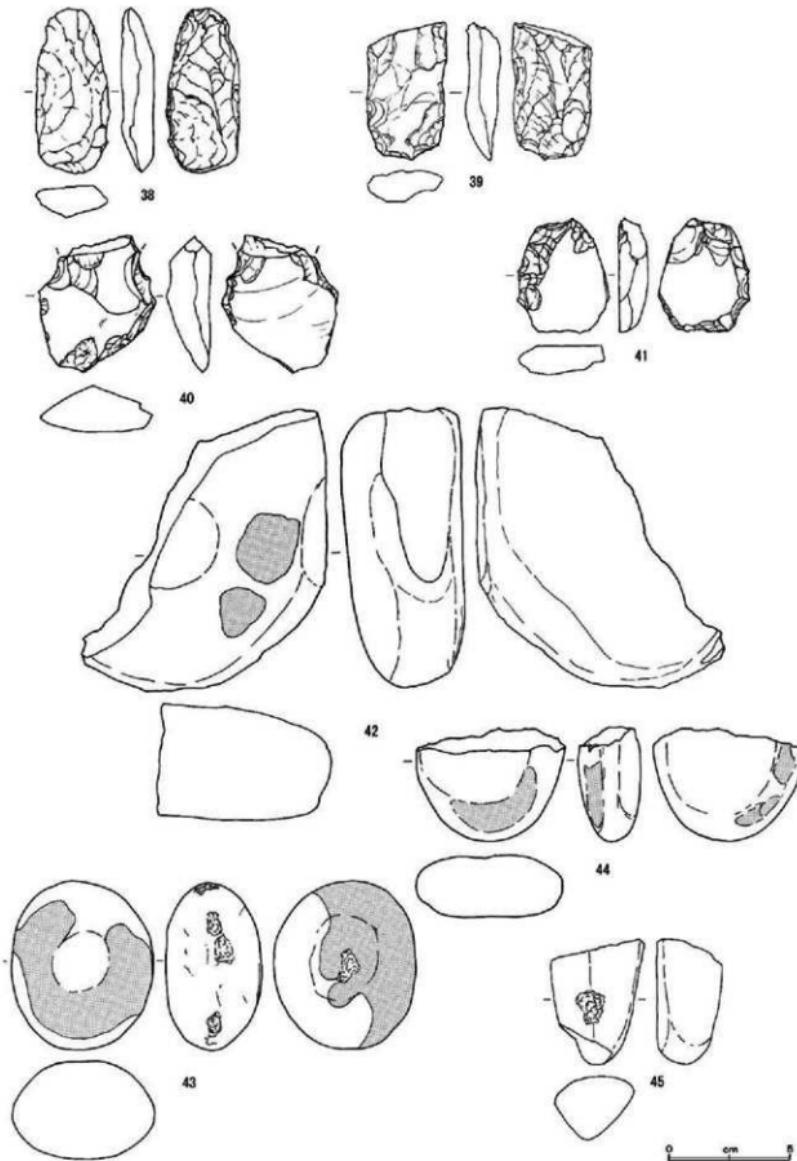
23~25は中期前葉の阿玉台式に比定される。23は、阿玉台Ib式に比定される口縁部片である。やや肥厚する口縁部に断面三角形の隆帯が弧状に貼付され、その脇に2条の角押文が施されている。色調は黄褐色で胎土には多量の白色粒子と風化黒雲母が含まれている。24は阿玉台Ib式に比定されるやや薄手の胴部片である。断面三角形の隆線が貼付され、その脇に浅い角押文が施される。色調は橙色で焼成は堅緻である。胎土には微細な白色粒子と風化黒雲母が多量に含まれている。25は、阿玉台II式に比定される口縁部片である。粘土帶の貼付により口唇部が内側に肥厚している。Y字状に隆帯が貼付され、隆帯上には刻みが施されている。胎土には多量の白色粒子と風化黒雲母が含まれている。

26~28は、中期後葉の加曾利E式に比定される口縁部～胴部片である。26は、波状口縁をもつ口縁部片である。隆帯による区画文と区画内に0段多条RL繩文が施された後、隆帯脇に凹線が施されている。器面は内外面共に丁寧なミガキ調整が認められる。27は、胴部片である。複節LRL繩文が縦位に施された後、幅4mmの凹線による懸垂文が施され、凹線間は磨り消されている。内面にはタテミガキが施されている。色調は橙色で焼成は堅緻である。いずれも加曾利E3式に位置づけられる。28は中期末葉加曾利E4式とみられる口縁部片である。直線的な口縁部で口唇部がわずかに内傾する。無節L繩文が施された後、幅2mmの細い沈線が施文される。胎土には多量の白色粒子が含まれている。

29~31は、中期後葉の連弧文土器である。29は口縁部片である。地文として単軸絡条体Lの撫糸文が縦位に施された後、4本の単沈線による区画文と交互刺突文が施文されている。色調は明褐色で胎土には白色粒子が多量に含まれている。30は胴部片である。櫛歯状工具による条線が縦位に施された後、2本1組の連続弧線文が施文される。色調は黄褐色、胎土には多量の白色粒子と角閃石が含まれている。31は、頸部片とみられる。単節RL繩文が縦位に施された後、幅4~5mmの凹線による区画文と円形押捺文が施されている。色調は明褐色、胎土には白色の砂礫が多量に含まれている。時期は、29・30が連弧文2段階（永瀬2007）、31が連弧文3段階に位置する。

32・33は後期初頭の称名寺式に比定される。32は波状口縁の一部である。欠失しているが突起が付されていたとみられる。単節LRL繩文が横位に施された後、単沈線が施文されている。色調は黄褐色、胎土には白色粒子が含まれている。33は胴部片である。幅3mmの深い沈線による区画文と列点文が施文されている。色調は暗黄褐色、胎土には微細な白色粒子が多量に含まれている。32は称名寺I式、33は称名寺II式に比定される。

34は後期前葉の堀之内I式に位置すると推測される。内面はヘラ状工具によるヨコナデ後、タテミガキが等間隔に施されている。文様は、単軸絡条体Lによる撫糸文が施された後、深い単沈線によるジ



第7図 H-4号住居跡・遺構外出土石器

グザグの懸垂文が施文される。色調は暗褐色で焼成は非常に堅緻である。胎土には微細な白色粒子と石英が含まれる。

35は時期不明の胴部片である。櫛歯状工具による波状文が2段、横方向に施文されている。色調は橙色で内面は被熱によって器壁が爆ぜた箇所が認められる。胎土には砂粒が含まれている。

石器（第7図36・37、第8図36～45）

石鏟1点、スクレイバー1点、剥片2点、打製石斧3点、石皿1点、磨石2点が出土している。石皿42と磨石43は床面から出土しており、この内42は、第6図2～9と共にまとまった状態で検出された（図版1）。閃緑岩製で両面ともに摩滅している。上面にはやや凹みがある。磨石43も摩滅が顕著で被熱している痕跡が認められた。石鏟36はチャート製、スクレイバー37は、黒曜石製である。

石鏟、スクレイバー、打製石斧は縄文時代の所産であろうが、石皿42は、土師器などとともにまとまって検出されたその出土状況から土師器と同時期のものと推測される。床面から検出された43も古墳時代前期に位置づけられる可能性がある。

2 遺構外出土遺物（第8図38・45）

遺構外からは、短冊形の打製石斧1点、蔽石1点が出土している。

第5表 遺跡範囲確認調査出土石器一覧表

遺物No.	種類	石材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第7図36	石鏟	チャート	H-4号住覆土	2.1	1.4	0.4	1	
第7図37	スクレイバー	黒曜石	H-4号住覆土	2.5	4.0	1.4	11	
第8図38	打製石斧	砂岩	遺構外	10	4.5	2.0	110	短冊形
第8図39	打製石斧	砂岩	H-4号住床直	8.4	4.9	2.0	99	短冊形
第8図40	打製石斧	泥岩	H-4号住覆土	8.4	7.2	2.5	151	分銅形
第8図41	打製石斧	泥岩	H-4号住覆土	7.0	5.6	2.8	90	楕形
第8図42	石皿	閃緑岩	H-4号住床面	17.1	15.0	7.3	2220	両面摩滅
第8図43	磨石	安山岩	H-4号住床面	10.3	8.7	6.0	621	被熱顕著
第8図44	磨石	玄武岩	H-4号住覆土	7.0	9.1	3.8	285	
第8図45	蔽石	砂岩	遺構外	7.7	5.6	4.0	180	

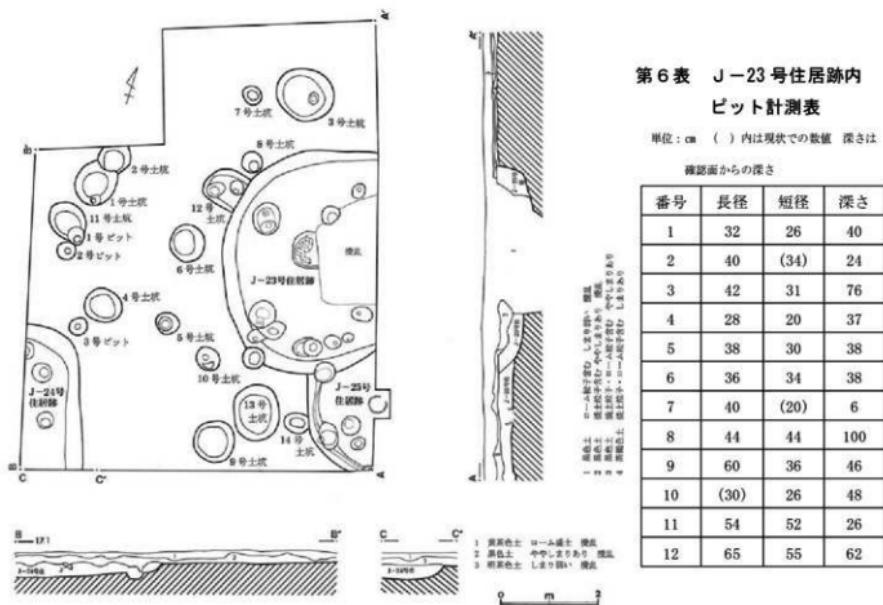
第IV章 第2次調査の遺構と遺物

第1節 遺構

1 住居跡

J-23号住居跡（第10図・第6表）調査区中央東寄りで検出された住居跡である。調査時には第1号住居跡と呼称した。平面形状は直径約4.5mの円形とみられ、東側の推定約1m分が調査区外に位置するとのみられる。また、中央付近から東側の床面の約半分は、床面以下まで擾乱が及んでおり破壊されていた。確認面から床面までの深さは約50cmを測る。覆土は、床面直上に炭化物粒子や焼土粒子を多く含む層の堆積があり、上層ほどこれらの割合が少なく、その粒径も小さくなる傾向である。床面の中央よりやや北よりには炉跡が検出された。平面形状は直径約75cmの円形とみられるが、東側を擾乱によって

南中丸下高井遺跡



第9図 第2次調査全測図及び全土層図

破壊されている。床面からの掘り込みの深さは約7cmを測る。炉跡内からは埋設土器の一部とみられる土器片が出土した。床面からはピットが12基検出された。寸法等は計測表(第6表)に記す。

時期は、炉跡に設置されたとみられる土器から縄文時代中期後葉の加曾利E1~2式に位置づけられる。

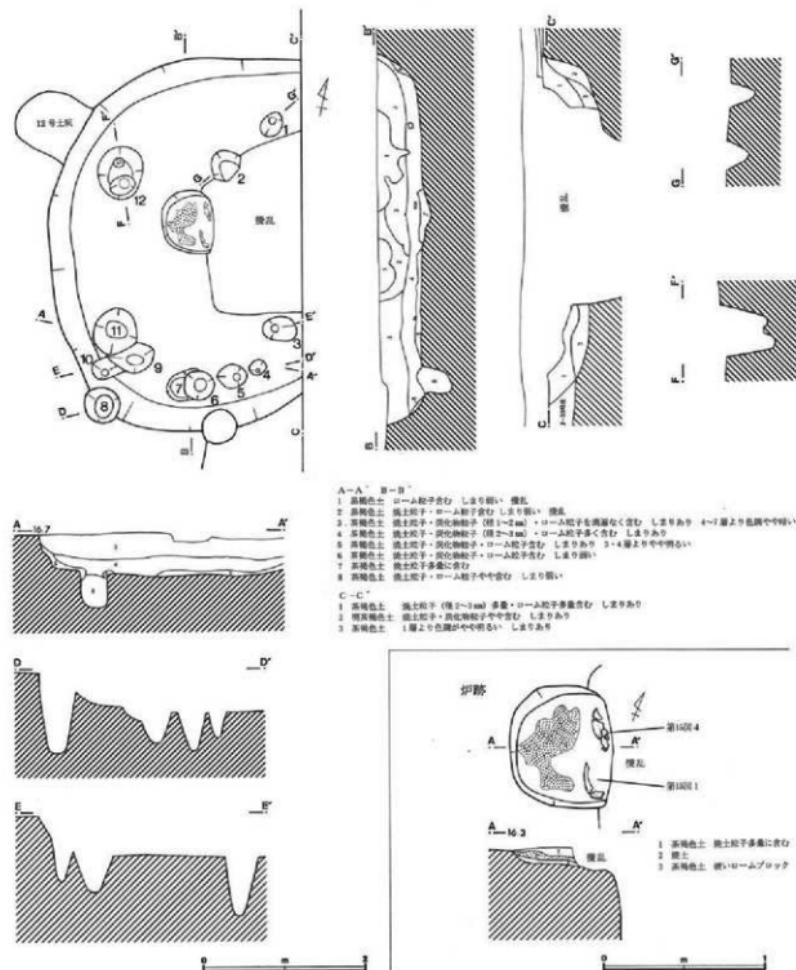
J-24号住居跡 (第11図・第7表)

調査区南西隅で検出された住居跡である。調査時には第2号住居跡と呼称した。造構の大半は調査区外に位置し、調査を実施したのは住居跡の北東隅、南北約3m、東西約1.2mの範囲のみである。平面形状は隅丸の方形ないし長方形とみられ、隅部は半径約1m程度の円弧を描く。確認面から床面までの深さは約25cmを測る。覆土は床面から確認面までほぼ均質な茶褐色土で、色調は下層でやや明るい。床面にはピットが3基検出された。寸法等は計測表(第7表)に記す。北側の1基は覆土の状況から住居跡埋没後に掘削された新しいものである。他の2基は床面からの深さ約60cmを測り、住居跡に伴う柱穴とみられる。覆土は2基とも、灰茶褐色土で焼土、炭化物粒子を含み、ローム粒子をやや含み、しまりありと記録されている。

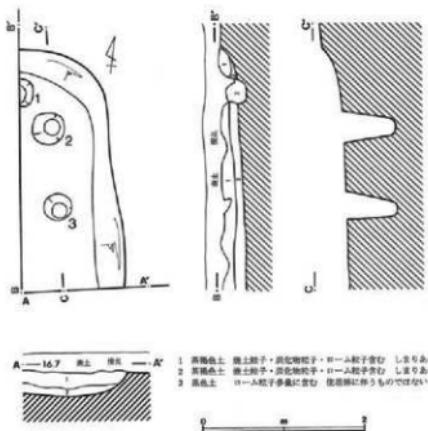
第7表 J-24号住居跡内ピット計測表

単位: cm ()内は現状での数値 深さは確認面からの深さ

番号	長径	短径	深さ
1	34	(17)	11
2	40	38	64
3	34	32	65



第10図 J-23号住居跡



第11図 J-24号住居跡

J-25号住居跡（第12図・第8表）

調査区南東隅で検出された住居跡である。調査時には第3号住居跡と呼称した。遺構の北側はJ-23号住居跡に切られていると記録されているが、当住居跡に埋設された埋甕の時期は、J-23号住居跡に対して推測される時期よりも新しい。従って、新旧関係はJ-23号住居跡→J-25号住居跡の順に構築された可能性がある。

遺構の東側は調査区外に統いており、調査を実施したのは住居跡の南西隅、南北約2.5m、東西約1.2mの範囲のみである。平面形状は円形または隅丸形とみられ、調査範囲内の住居跡の壁は半径約1.5m程度の円弧を描いている。確認面から床面までの深さは約40cmを測る。覆土は床面から確認面まではほぼ均質な茶褐色土である。床面には、南側・西側の壁から約1.2mの位置に埋甕が検出された。底部は打ち欠かれており、正位に埋設されている。周囲に焼土等は検出されなかった。ピットは5基検出された。寸法等は計測表（第9表）に記す。うち3基は壁際に位置し、直径約40cm、床面からの深さは約30~40cmを測る。時期は、埋甕から縄文時代中期後葉の加曾利E3式期に比定される。

2 土坑（第14図）

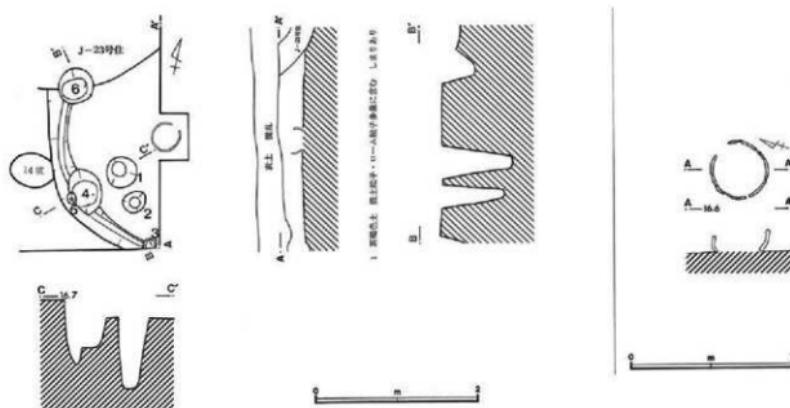
13基の土坑が検出された。

第1号土坑と第2号土坑（調査時には第3号土坑と呼称）は、調査区の北西側で検出された。第1号土坑は長径約100cm、短径約80cmの長円形、第2号土坑は直径約70cmの円形で、一部が重複しており

第8表 J-25号住居跡内ピット計測表

単位：cm () 内は現状での数値 深さは確認面からの深さ

番号	長径	短径	深さ
1	37	36	85
2	30	26	40
3	15	(10)	30
4	53	38	34
5	16	13	56
6	44	42	40



第12図 J-25号住居跡

第1号土坑の方が新しい。確認面からの深さは第1号土坑が約15cm、第2号土坑が約10cmを測る。第1号土坑の南端には直径約20cmのピットが伴い、この底面の深さは確認面から約25cmを測る。

第2号土坑（調査時には第3号土坑と呼称）は調査区の北東側で検出された。長径約120cm、短径約100cmの長円形で、確認面からの深さは最大約20cm、底部には直径約20cmのピットを持ち、この底面の深さは確認面から約35cmを測る。

第3号土坑（調査時には第2号土坑と呼称）は、調査区北側で検出された。平面形状は直径約110cmのやや歪んだ円形で、確認面からの深さは約20cmを測る。

第4号土坑は、調査区中央やや西寄り、J-24号住居跡北側で検出された。平面形状は直径約80cmのやや歪んだ円形で、確認面からの深さは約10cmを測る。南西側の一部は擾乱により失われている。

第5号土坑は、調査区中央やや南西寄りで検出された。平面形状は直径約45cmの円形で、確認面からの深さは約70cmを測る。

第6号土坑は、調査区中央やや北寄りで検出された。平面形状は直径約70cmの円形で、確認面からの深さは約20cmを測る。

第7号土坑は、調査区北寄り、第3号土坑西側で検出された。平面形状は直径約40cmのやや歪んだ円形で、確認面からの深さは約7cmを測る。

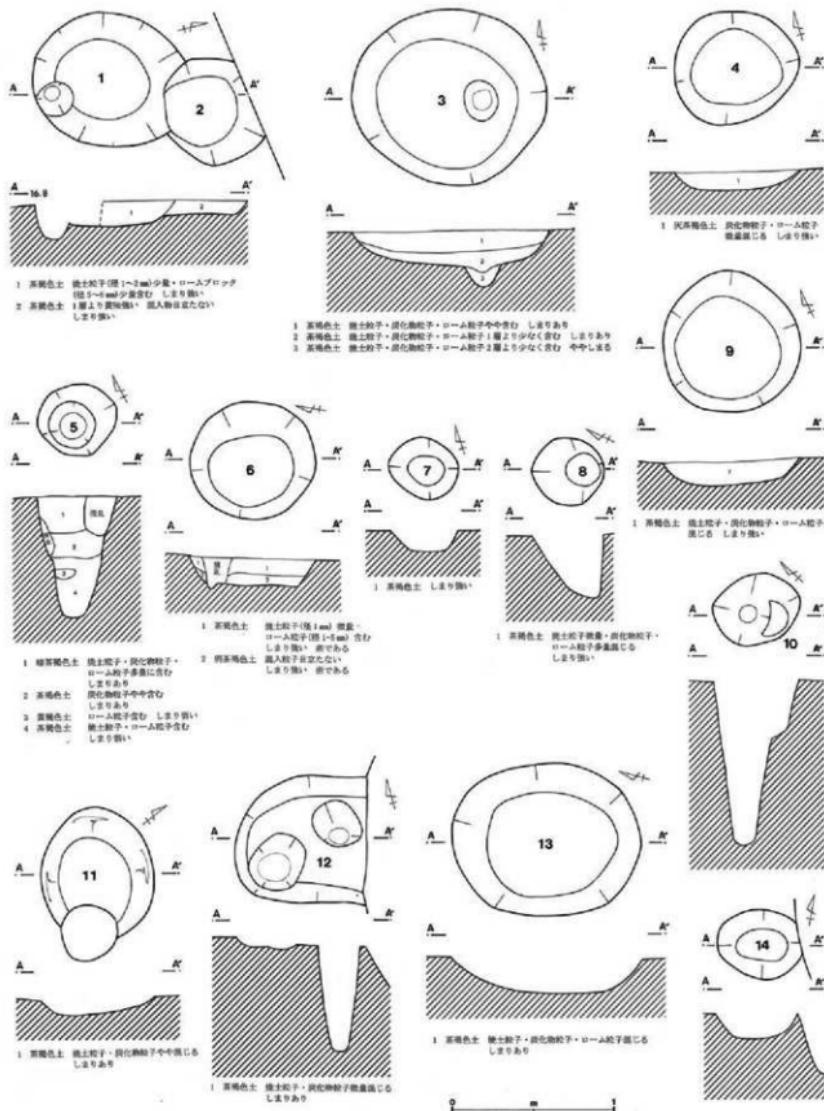
第8号土坑は、調査区北寄り、J-23号住居跡のすぐ西側で検出された。平面形状は直径約40cmの円形で、確認面からの深さは約40cmを測る。J-23号住居跡に伴う柱穴等の構造である可能性も考えられる。

第9号土坑は、調査区南端で検出された。平面形状は直径約85cmの円形で、確認面からの深さは約10cmを測る。

第10号土坑は、調査区南より、J-23号住居跡西側で検出された。平面形状は長径約55cm、短径約40cmの長円形で、確認面からの深さは約100cmを測る。

第11号土坑は、調査区西端で検出された。平面形状は長径約85cm、短径約70cmの長円形で、確認面

南中丸下高井遺跡



第13図 第2次調査土坑

からの深さは約10cmを測る。南東端に第1号ピットが重複する。

第12号土坑は、調査区中央やや北よりで検出された。東端がJ-23号住居跡と重複する。平面形状は重複部分を除く長径直径約80cm、短径約75cmの小判型で、確認面からの深さは約10cmを測る。内部に2基のピットを持ち、この深さはそれぞれ確認面から約30cm、約100cmを測る。J-23号住居跡に伴う柱穴等の遺構である可能性も考えられる。

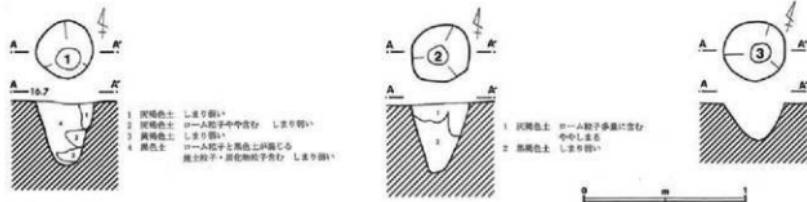
第13号土坑は、調査区南端の第9号土坑東側で検出された。平面形状は長径約115cm、短径約90cmの長円形で、確認面からの深さは約20cmである。

第14号土坑は、調査区南端のJ-25号住居跡西側で検出された。東端がJ-25号住居跡にわずかに重複する。平面形状は重複部分を除く長径約50cm、短径約40cmの長円形で、確認面からの深さは約15cmである。

第9表 第2次調査ピット計測表

単位: cm () 内は現状での数値 深さは確認面からの深さ

番号	長径	短径	深さ
1	36	34	40
2	38	34	49
3	37	36	23



第14図 第2次調査ピット群

第2節 遺物

1 住居跡出土遺物

J-23号住居跡

土器 (第15図1~28)

J-23号住居跡からは、約17kgもの土器が検出され、このうち覆土上層から出土した土器は約10kgに及ぶことから、出土土器の大半が住居廃絶時、あるいは廃絶後に投棄されたものと考えられる(第10表)。

炉跡やピットから出土した土器は少量であるが、中期中葉から後葉の浅鉢形土器などが出土してい

南中丸下高井遺跡

る。下層から上層にかけて勝坂 3 式（井戸尻式）・加曾利 E 1 式・2 式などが比較的多く認められる。

第 15 図 1～4 は炉跡から出土している。1 は、加曾利 E 1～2 式の頸部片である。攪乱によって破壊され、頸部の 1/3 程度が遺存する。正位で出土していることから、炉に設置された土器とみられる。当該期に認められる「頸部無文帶」に当たり、器面は丁寧にミガキ調整が施されている。色調は暗黄褐色で焼成は堅緻、胎土には白色粒子のほか、角閃石が認められる。2 は、1 に接するように出土した勝坂 3 式の胴部片である。円筒形の深鉢形土器の一部とみられる。刻みの施された隆帯と沈線によって文様帯が縦位に区画され、区画内には三角押文が充填されている。色調は明黄褐色、器面は粗雑で砂粒が多く含まれている。3・4 は、勝坂 3 式～加曾利 E 1 式に比定される浅鉢形土器である。胴部より上半部が攪乱によって壊され、その土中より検出されたが、一部は炉跡で検出された下半部と接合した。1/3 程度が遺存する。推定口径は 40.6 cm、残存高は 17.4 cm であり、器形は強く屈曲する口縁部と厚角の口唇部をもつ。隆帯による推定 4 単位の S 字文が貼り付けられ、それぞれが沈線によって縁取られている。3 の S 字文の中央部は突起状に外面に大きく突き出ている。色調は明褐色、焼成は堅緻で器面は内外面共に丁寧なミガキ調整が施されている。胎土には多量の砂礫が含まれる。1 と同様に炉跡に伴っていた可能性がある。

第 15 図 6 はビット 1 から出土した胴部片である。地文として単節 R L 繩文が縦位に施された後に 3 本 1 組の单沈線による懸垂文が施されている。中期後葉の加曾利 E 2 式とみられる。

第 15 図 5 は覆土下層、同図 7～14、第 16 図 16～29 は覆土上層から出土している。

5 は、厚角状の口唇部をもち、器面は内外面共に丁寧なミガキ調整が施されている。S 字状の隆帯と沈線によるモチーフが描かれ、一部には交互刺突文が施されている。S 字の部分には、赤彩された痕跡が認められる。色調は橙色である。時期は、中期中葉の勝坂 3 式～加曾利 E 1 式に比定される。

7 は、同一地点から潰れて出土した深鉢形土器である。全体の 15% 程度が遺存する。推定口径は 31.6 cm、残存高 30.2 cm である。地文として、口縁部には単節 L R 繩文が横方向に、胴部には単節 R L 繩文が縦方向に施された後、隆帯による渦巻き区画文、直線懸垂文、沈線による頸部区画文、蛇行懸垂文が施文される。色調は黄褐色で、風化によって器面は粗雑である。地文やモチーフから、加曾利 E 2 式に位置づけられる。胎土には白色粒子が多量に含まれている。8 は、上層から検出された小型の深鉢形土器である。口縁部～胴部上半は欠失する。底径は 6 cm、残存高は 9.3 cm である。胴部を区画する隆帯がめぐり、隆帶上には刻みが施されている。色調は明褐色、胎土には白色粒子が含まれている。

9 は、上層から出土した深鉢形の口縁部片である。断面が三角形の高い隆帯による梢円形区画文が施され、区画内には幅 3 mm 程度の角押文が充填される。色調は暗黄褐色、焼成は堅緻である。胎土には白色粒子と風化黒雲母が含まれている。文様要素から、中期前葉の阿玉台 I b 式に位置づけられる。10 は、補修孔のある口縁部片である。直線的に立ち上がる器形で口唇部は内側にやや張り出している。器厚は 1.2 cm である。単節 L R 繩文が縦位に施された後、単沈線による波状文、横方向の沈線が描かれている。中期中葉の勝坂 2 式（藤内式）の可能性がある。11 は、勝坂 2 式とみられる胴部片である。隆帶貼付→竹管状工具による押引き文→隆帶間の沈線の順に施文されている。色調は明褐色、胎土には多量の風化黒雲母が含まれている。12 は、円筒形深鉢形土器の胴部片である。渦巻き状の隆帯とその中央部分に放射状に沈線が施された突起が付されている。隆帶上、隆帶脇には刻みや沈線、沈線による玉抱き三叉文などが施されている。色調は明褐色、胎土には白色粒子と砂礫が多量に含まれている。文様要素や文様の特徴から勝坂 2 式～3 式に比定される。13 は、波状の突起がある口縁部片である。厚

さが1cmを超える高い隆帯によって器面が区画され、区画内にはキャタピラ文、波状沈線が充填されている。色調は明褐色で焼成は堅緻である。胎土には白色粒子と微細な風化黒雲母が含まれている。勝坂2式に比定される。

14は、口縁部上に付された突起の一部である。紡錘形で、外面には同形態の凹みがある。内面には中央と縁辺にヘラ状工具による刻みが施されている。色調は明褐色で、胎土には多量の白色粒子が含まれている。中期中葉の勝坂3式（井戸尻式）に比定される。15は、上層から検出された勝坂3式の胴部片である。鎖状の隆帯→横方向のO段多条R L繩文→隆帯脇の回線の順に施文されている。内面に煮沸痕があり、器壁は剥落している。色調は明褐色、胎土に白色粒子が多量に含まれている。

第16図16は勝坂3式～加曾利E1式とみられる深鉢形の口縁部片である。16は、推定4単位の突起が付されている。突起上面は円形に回んでおり、左右には渦巻き状の隆帯、中央には口縁部と連結する刻みの入った隆帯が貼り付けられている。口縁部には指頭状の押捺と刻みの入った太い隆帯が渦巻き状に施されている。突起形状と文様表現から蛇体装飾の可能性がある。色調は黄褐色、胎土には白色粒子と角閃石が含まれている。

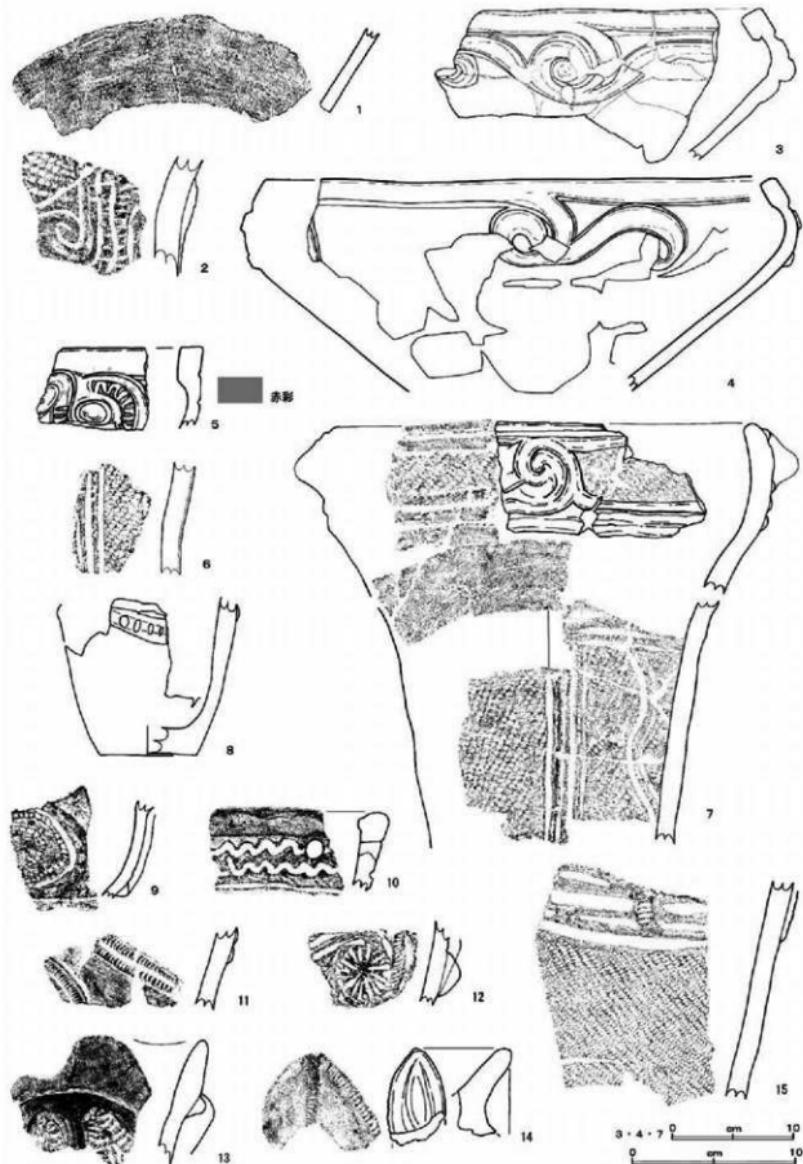
17は、上層より検出された中期後葉の加曾利E1式の口縁部～胴部片である。O段多条R L繩文が横位に施された後、断面が台形のクランク状隆帯と頸部を区画する隆帯が貼付される。隆帯脇には沈線、胴部には直線懸垂文が施文されている。色調は明褐色、胎土には白色粒子が含まれている。

18～20は、加曾利E2式とみられる深鉢形の胴部片である。18は、地文としてO段多条R L L繩文が縦位に施された後、2本1組の隆帯による直線懸垂文、半裁竹管による沈線が施されている。色調は明褐色、内面は被熱により剥落している。胎土には白色粒子が多量に含まれている。19は、単節R L繩文が縦方向に施された後、半裁竹管による2本1組の沈線懸垂文が施文されている。色調は明褐色、上半部には煤が付着している。20は、単節R L繩文と沈線による蛇行懸垂文が認められる。

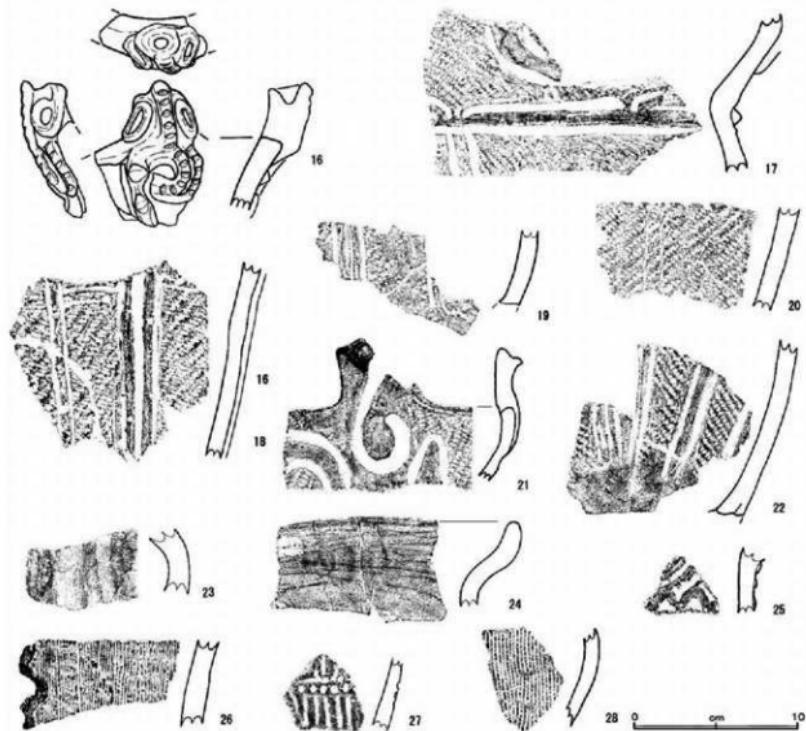
21～23は、上層から出土した加曾利E3式に比定される土器片である。21は、推定4単位の突起が付され、突起から口縁部にかけて回線による縦方向のS字文が施文される。地文として、単節R L繩文が口唇部では横方向、胴部では縦方向に施された後、回線による逆U字状懸垂文が施文される。回線間の地文は磨消されている。内面は、横方向の丁寧なミガキ調整が施されており、焼成は堅緻である。色調は橙色で胎土には白色粒子と石英が含まれている。22は、深鉢形の胴部片である。単節L R繩文が縦位に施された後、沈線による直線懸垂文が施文されている。沈線間の地文は磨消されている。色調は橙色で底部付近には煤が付着している。23は、両耳鉢の把手の一部とみられる。外面には縦方向のミガキ調整が認められる。胎土には白色粒子と石英が含まれている。

24～26は、中期後葉の曾利式土器の口縁部～胴部片である。24は、長胴甕タイプの無文口縁部である。内外面共に、ヘラ状工具による横方向のナデ調整が顕著である。胎土には微細な白色粒子、風化黒雲母が含まれている。25は重弧文、もしくは斜行沈線文タイプの頸部片である。波状粘土紐の貼付後、口縁部に斜行する隆帯の貼付→沈線の順に施文される。胎土には砂礫が多量に含まれている。26は、長胴甕タイプの胴部片である。地文として6本1組の櫛齒状工具による条線の縦位施文後、粘土紐による蛇行懸垂文が施文される。器厚は1.2cmと厚く、焼成は堅緻である。胎土には、微細な白色粒子が多量に含まれている。24～26は、いずれも曾利II式段階に位置するとみられる。

27は、上層から出土した中期後葉の連弧文土器の頸部片である。直線的な器形をもつ深鉢形とみられる。沈線によって頸部が区画された後、縦位の沈線、円形刺突文が施される。色調は橙色で、外面は



第15図 J-23号住居跡出土土器(1)



第16図 J-23号住居跡出土土器(2)

風化して粗雑であるが、内面は丁寧なミガキ調整が認められる。胎土には白色粒子が多量に含まれている。施文順序や文様要素から連弧文3段階のものとみられる。

第10表 J-23号住居跡出土土器時期別集計表

出土位置	重量(g)	点数	阿須台			勝坂			加賀糠丘			連弧文			利根			中里			猪葉			中期			不明					
			I	b	II	勝坂	1	2	3	1	2	3	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3			
SI	639	9					71	1	280	4	165	3									123	1										
P1	516	15					373	5		41	1		31	1																71	8	
P2	234	11					19	1		12	1	36	1								125	4	43	2								
P4	11	1																		11	1											
P5	25	5																											23	5		
P6	70	2								51	1	19	1																			
P7	47	2											42	1															5	1		
下層	1381	88	34	2	183	7	22	1	91	7	194	10								13	1		395	15		172	11	358	34			
上層	10854	561	31	2	457	22	7	1110	6	431	22	1189	37	290	10	2700	53	648	25	136	9	119	3	167	14	1618	66	1093	43	1852	108	9
埋土合計	5046	126	24	3	23	1	28	2	139	6	340	11	1480	12	287	8	556	11	192	5	263	2	42	4	715	29	466	16	414	29		

南中丸下高井遺跡

28は、深鉢形土器の胴部片である。細かな単軸絡条体Lの撚糸文が縦位に施されている。胎土には白色粒子、角閃石が多量に含まれている。中期後葉に位置づけられる。

石器（第18図1～4、7・8・10、第14表）

J-23号住居跡からは、打製石斧2点、磨製石斧1点、石皿3点、砥石1点が出土した。

1～3は、いずれも砂岩製の短冊形打製石斧である。1・3は刃部、2は基部が欠損する。3は、上層より検出された磨製石斧である。緑色凝灰岩製で胴部中位から上位にかけて折損し、刃部が残存する。胴部には敲打による成形痕が観察される。両刃弧刃で丁寧なつくりである。

7・8は上層より検出された石皿片である。7は砂岩製で、円礫の上下面に研磨痕が認められる。全体に被熱している。8は花崗岩製で上下面に研磨痕がある。

10は、泥岩製の砥石である。長円礫の全面に顕著な研磨痕が確認される。

土製品（第18図11・12）

J-23号住居跡の下層と上層から、それぞれ1点ずつ土器片錠が検出されている。下層より出土した11は、土器の頸部片を加工しており、短辺に紐掛け用の切り込みが施されている。縁辺の一部はよく研磨されている。長径5.7cm、短径4.2cm、重量は42.4g。器面には単軸絡条体Lによる撚糸文が縦位に施されている。色調は明褐色である。地文の特徴から中期後葉に位置づけられる。上層より出土した12は、土器の胴部片を加工し、短辺に切り込みが施されている。縁辺の一部は研磨されている。長径4.5cm、短径3.5cm、重量は24.7gである。地文は単節LR繩文が縦位に施されている。地文の特徴から中期後葉とみられる。

J-24号住居跡出土遺物

土器（第17図1～5）

調査区の北東隅で確認されたJ-24号住居跡は、発掘された範囲が小規模であるため、約700gと全体の出土遺物も少量であった（第11表）。

1は、下層より出土した連弧文土器の胴部片である。地文として櫛歯状工具による条線が縦位に施された後、幅3mmの沈線による弧線文が描かれる。色調は黄褐色、胎土には堆積岩類とみられる砂礫が含まれている。文様の特徴から連弧文2段階に比定される。

2～4は、加曾利E2式とみられる深鉢形土器の一部である。2は、上層から出土した胴部片である。単軸絡条体Lによる撚糸文が縦位に施された後、隆帯による懸垂文が貼付されている。隆帯脇には沈線が施されている。色調は橙色で、胎土には微細な白色粒子が多量に含まれている。文様要素から加曾利E2式に位置づけられる。3は、地文として単節RL繩文が縦位に施された後、幅5mm、3本1組の沈線によるモチーフが施文される。内面はミガキ調整が観察される。色調は橙色で、胎土には砂礫が含まれる。4は、地文として0段多条RL繩文が横方向に施された半裁竹管による平行沈線が施文される。色調は明褐色である。5は、下層から出土した深鉢形土器の胴部片である。単軸絡条体Lによる斜方向の撚糸文と横方向に施文される単節RL繩文が観察される。色調は明褐色で、器面は風化のためか粗雑である。胎土には多量の白色粒子と角閃石が含まれる。外面上部には煤が付着している。中期中葉に位置するとみられる。

第 11 表 J-24 号住居跡出土土器時期別集計表

出土位置	重量(g)	点数	阿玉台		勝坂		加曾利E		連弧文		中葉		後葉		中期		不明	
			II		2		3		2		中葉		後葉		中期		不明	
			g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点
P1	26	4														26	4	
下層	176	7					15	1			10	1	147	5				
上層	273	24	35	2	47	2	18	1	53	3					42	2		80 14
覆土一括	204	7					34	2	35	1			50	3			85	1

J-25 号住居跡出土遺物

土器 (第 17 図 6 ~ 12)

J-23 号住居跡と重複して確認された J-25 号住居跡では、検出された遺物は少量で出土点数は 53 点であったが、住居中央部より完形に近い埋設土器が出土している。総重量は 5.4 kg であった。

6 は、住居跡中央部に「埋甕」として、正位に埋設された状態で出土したキャリバー形の深鉢である。底部が打ち欠かれていることを除き、ほぼ完存する。口径は 33.2 cm、残存高は 32.5 cm である。地文として複節 L R L 繩文の縦位施文後、口縁部には隆帯による渦巻区画文、胴部には幅 4 ~ 5 mm の凹線による大小の渦巻文が描かれる。頸部は無文である。口縁部を区画する隆帯は横方向に伸び、一部では渦巻文と区画文が一体化している。隆帯脇は凹線によってナゾリが加えられ、胴部に施文される凹線間の地文は磨消されている。色調は橙色で、外面の頸部から胴部上半にかけて、煮沸による煤が付着している。口唇部にめぐる沈線が消失している点や、口縁部の渦巻区画文が横方向に伸びている点、凹線間の磨消が顕著である点などから、中期後葉の加曾利 3 式に位置するとみられる。

7 は、埋甕周辺より出土した深鉢形の口縁部片である。半裁竹管による平行沈線、爪形文、キャタピラ文が施文されている。色調は明褐色、胎土には花崗岩とみられる多量の砂礫が含まれている。中期中葉の勝坂 2 式 (藤内式) に比定される。8・9 も同様に、勝坂 2 式に位置する口縁部、胴部片である。

8 は、隆帯と隆帯脇にキャタピラ文、波状沈線文が施されている。器壁が厚く、1.3 cm である。色調は暗褐色で胎土には多量の白色粒子が含まれている。9 は、隆帯による梢円形区画文が施され、区画内には蓮華文が施文される。10~12 は、勝坂 3 式に比定される胴部片である。10 は、刻みが施された隆帯による区画文と沈線文が施文されている。色調は明褐色、胎土には白色粒子と赤色粒が含まれている。40 は、円筒形の深鉢の胴部とみられ、隆帯による区画文と三叉状の沈線が施されている。12 は 2 本単位の沈線による区画文と横方向の平行沈線が施文されている。

石製品 (第 18 図 13)

正確な位置は不明であるが、埋甕に伴って石棒の一部とみられる破片が出土している。第 18 図 13 は、凝灰岩製で外面には被熱痕が観察される。

南中丸下高井遺跡

第12表 J-25号住居跡出土土器時期別集計表

出土位置	重量(g)	点数	阿玉台	勝坂			加曾利E			通鑑文			中葉	後葉	中期	不明	その他			
				II			1	2	3	1	2	3								
				g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点			
埋蔵	4504	1								4504	1									
埋蔵周辺	30	8			10	1										20	4			
P3	168	6					100	4							34	1	34			
覆土一括	537	32	35	3	4	1	37	3	73	5	71	4	98	4	14	1	31	2	175	9

2 土坑出土遺物

第2次調査では、全体に15基の土坑が確認されたが、この内、土器が検出されたのは7基であった。いずれも出土量は少量であるが、遺構の時期が推測される資料を掲載した。

1号土坑（第17図13）

13は、深鉢形の胴部片である。地文として単節R L繩文が縦位に施された後、剥落しているが隆帯が弧状に貼付されていたとみられる。中期後葉の加曾利E式に位置づけられる。

3号土坑（第17図14・15、第18図9）

土器（第17図14・15）

14は、阿玉台I b式の胴部片である。断面三角形の隆帯と隆帯脇に2条の刺突文が施されている。胎土には多量の白色の砂礫と風化黒雲母が含まれている。15は、深鉢形土器の口縁部～頸部片である。幅広の隆帯の貼付後、隆帯に沿って凹線が施されている。頸部とみられる箇所は無文である。いわゆる「頸部無文帶」であり、中期後葉の加曾利E式に位置すると推測される。

石器（第18図9）

砂岩製の敲石である。棒状砾の短辺を除く全面中央部に浅い凹み穴が観察され、面が広い上下の凹み穴が特に顕著である。上下面には研磨された痕跡も確認できる。

5号土坑（第17図16・17）

土坑内より検出された大型破片2点を掲載した。16は、口縁部がやや開く円筒形の深鉢である。隆帯によって重三角文が施され、隆帯脇にはヘラ状工具によるキャタピラ文が施文される。口縁部には横方向にめぐる沈線とジグザグ文が施されている。胎土には微細な白色粒子と風化黒雲母が目立つ。色調は黄褐色である。17は、浅鉢形土器の口縁部辺である。口唇部内側には明瞭な段を有する。器面は外面から口唇部内側にかけて丁寧なナデミガキ調整が施されている。色調は明褐色で、多量の風化黒雲母と砂礫が含まれている。中期中葉の勝坂式に位置づけられる。

11号土坑（第17図18）

18は、「パネル文土器」の胴部片である。深い沈線によるパネル文と区画内に斜行沈線や蓮華文が充填されている。色調は明褐色で、胎土には微細な白色粒子が含まれている。

13号土坑（第17図19）

19は、深鉢形土器の口縁部片である。単軸絡条体Lによる撚糸文が施された後、隆帯による渦巻つなぎ弧文と沈線が施文されている。色調は明褐色である。中期後葉の加曾利E式とみられる。

第13表 土坑出土土器時期別集計表

遺構名	重量(g)	点数	阿玉台		勝坂		加曾利E		中葉		後葉		中期		不明		その他	
			Ib		II		2		g 点		g 点		g 点		g 点		g 点	
			g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点	g	点
1号土坑	274	7						228	2			15	1			12	3	
3号土坑	91	9	32	1			14	2	14	2						18	3	10
5号土坑	546	12	26	1	9	1	217	1			290	9						
10号土坑	20	1												20	1			
11号土坑	137	7					113	3			15	2				4	2	
12号土坑	184	13			30	1	30	2					60	5				
13号土坑	135	16							56	2	55	6				21	8	

3 遺構外出土遺物

土器（第17図20）

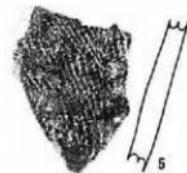
20は、調査区内の精査中に発見された小型土器の底部である。上部が欠失しているが、残存するわずかな外面に3本1組の沈線による直線懸垂文が底面まで施文されていることが確認できる。底面には沈線による渦巻文が施される。時期は、中期後葉の加曾利E 2式に位置する可能性がある。

石器（第18図5・6）

5・6は、いずれも緑色凝灰岩の磨製石斧である。5が刃部、6は刃部の一部と基部が折損している。6は両刃弧刃である。

第14表 第2次調査出土石器一覧（掲載分のみ）

遺物No.	種類	石材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第18図1	打製石斧	砂岩	J-23号住上面	11.45	6.3	1.5	135	短冊形
第18図2	打製石斧	砂岩	J-23号住上面	6.4	6.3	2.1	110	短冊形
第18図3	打製石斧	砂岩	J-23号住覆土	10.7	4.2	2.0	116	短冊形
第18図4	磨製石斧	緑色凝灰岩	J-23号住上層	7.3	5.0	1.7	85	基部、体部一部欠損
第18図5	磨製石斧	緑色凝灰岩	遺構外	8.5	4.2	2.8	142	刃部欠損
第18図6	磨製石斧	緑色凝灰岩	遺構外	6.3	4.9	2.5	115	基部欠損
第18図7	石皿	花崗岩	J-23号住上層	6.0	6.2	5.9	235	
第18図8	石皿	花崗岩	J-23号住上層	6.6	5.3	5.0	190	
第18図9	敲石	砂岩	3号土坑	10.3	3.7	3.1	229	
第18図10	砥石	泥岩	J-23号住覆土	15.5	5.3	3.0	200	



J-24号住居跡



J-25号住居跡

1号土坑



3号土坑

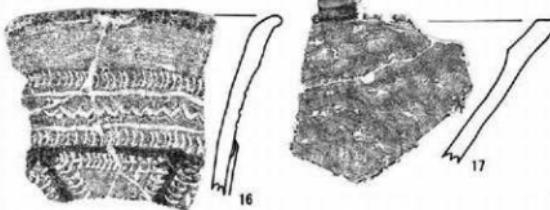


11号土坑



13号土坑

5号土坑



6 0 cm 10
0 10 cm

第17図 J-24号・J-25号住居跡・土坑・遺構外出土土器



第18図 第2次調査出土石器・土製品・石製品

第V章 第3次調査の遺構と遺物

第1節 遺構

1 住居跡

J-26・J-27号住居跡 (第19図・第15表)

調査区北側で検出された住居跡である。調査時には、調査区北西側の住居跡を第1号住居跡、調査区北東端の遺構を第2号住居跡と呼称して掘削を行ったが、土層断面等の精査から、第1号住居跡の範囲において新旧の遺構が重複している状況が確認され、また第2号住居跡とした箇所は土坑（第2号土坑）及び擾乱部分であることが確認された。本報告では、第1号住居跡として調査を行った遺構のうち、時期の新しいものをJ-26号住居跡、古いものをJ-27号住居跡として記述する。

J-26号住居跡 (第19図・第15表)

J-26号住居跡は、調査区内では全体がJ-27号住居跡と重複している。確認面から床面までの深さは約15cmを測る。覆土は暗褐色～暗茶褐色を呈する。プランが円形であると仮定すると直径は3m弱と推定される。西側・東側は擾乱によって失われており、今回の調査によって把握された範囲は全体の3割程度と推定される。ピットについては後述する。

J-27号住居跡 (第19図・第15表)

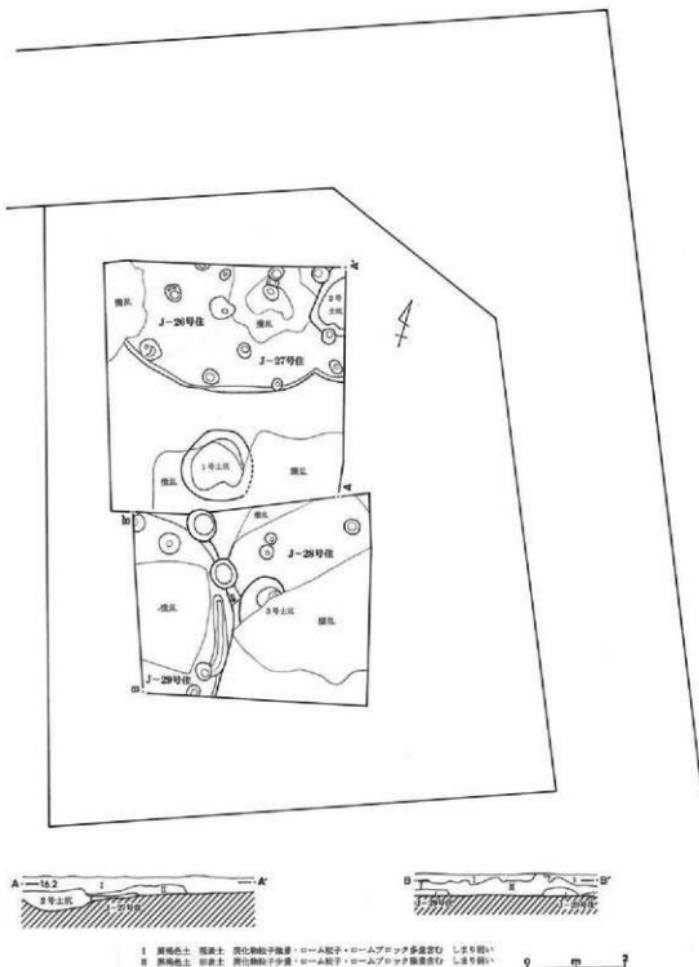
J-27号住居跡は、プランが円形であると仮定すると直径約5mの規模と推定される。調査区内にはこのうち南側の約半分が位置しており、北側は調査区外へと広がっている。確認面から床面までの深さは約10cmを測る。覆土は暗黄褐色を呈する。東側は第1号土坑及び擾乱、西側はJ-27号住居跡及び擾乱によって失われており、今回の調査により把握された範囲は、住居の南側の一部分のみ、全体の2割程度と推定される。

J-26号・J-27号住居跡の範囲及び隣接部分からはピットが14基確認された。寸法は第14表のとおりである。どちらの住居跡に帰属するものであるかは判断できなかつた。

**第15表 J-26・J-27号住居跡
ピット計測表**

単位：cm () 内は現状での数値 深さは確認面からの深さ

番号	長径	短径	深さ
1	36	33	22
2	32	28	15
3	32	25	20
4	32	26	55
5	21	(15)	23
6	33	28	28
7	25	21	29
8	30	26	27
9	33	30	32
10	47	45	62
11	24	20	11
12	30	(15)	15
13	38	30	49
14	45	40	16

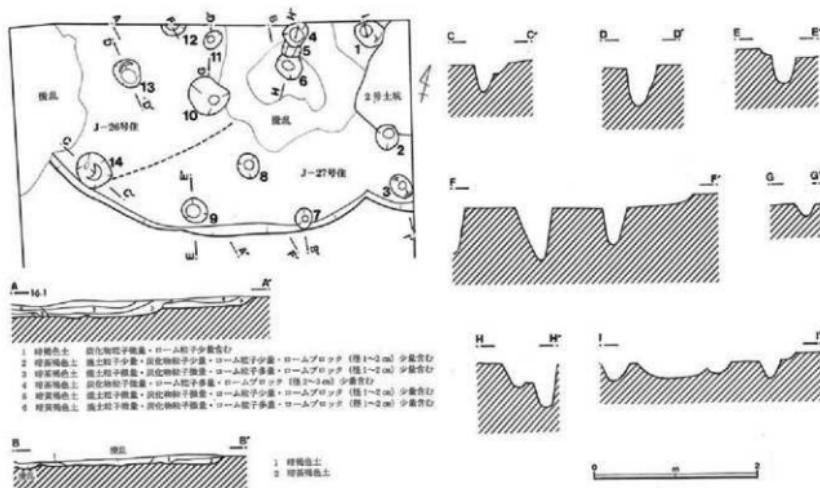


第19図 第3次調査全測図及び全土層図

J-28・J-29号住居跡（第21図・第16表・第17表）

調査区南側で検出された住居跡である。調査時には、調査区南東側の住居跡を第3号住居跡、調査区南西端の遺構を第4号住居跡と呼称して掘削を行った。いずれの遺構も調査区内ではおよそ半分程度の部分が擾乱によって失われておらず、また床面直上まで擾乱が及ぶ部分もあり遺存状況は悪い。

南中丸下高井遺跡



第20図 J-26・J-27号住跡

J-28号住跡 (第21図・第16表)

J-28号住跡は調査区の南東側に位置し、東側の一部が調査区外へと続いている。北側及び南側は第3号土坑及び擾乱によって失われており、全体の規模や形状は判然としない。形状を円形と仮定した場合、遺存部分から推定される直径は3~4m前後である。確認面から床面(掘り方下面)までの深さは約20cmを測る。覆土は上層で暗茶褐色、下層で暗黄褐色~黃褐色を呈し、上層には炭化物粒子が多く含まれている。下層覆土は住跡跡の縁辺部には見られず、上面で住跡跡全体が平坦となることから貼り床である可能性が考えられる。床面ではピットが3基確認された。寸法は第16表のとおりである。

J-29号住跡 (第21図・第17表)

J-29号住跡は調査区の南西側に位置し、西側及び南側は調査区外へと続いている。平面形状は直径約5mの円形と推定され、調査区内には全体の4割程度が位置しているが、調査区内の半分程度は擾乱によって失われている。壁沿いには一部に周溝状の掘り込みがみられる。確認面から床面までの深さは約15cmを測る。覆土は上層で暗茶褐色~暗褐色、住跡跡周縁部の下層で暗黄褐色~黃褐色を呈する。床面及び壁沿いではピットが6基確認された。寸法は第17表のとおりである。

第16表 J-28号住跡ピット計測表

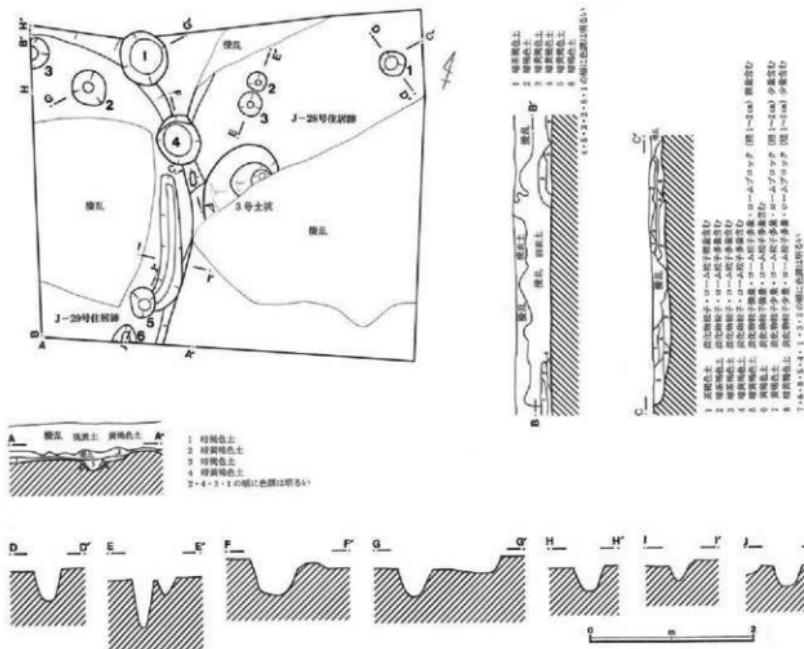
単位: cm 深さは確認面からの深さ

番号	長径	短径	深さ
1	30	30	37
2	23	23	26
3	32	27	59

第17表 J-29号住跡ピット計測表

単位: cm ()内は現状での数値 深さは確認面からの深さ

番号	長径	短径	深さ
1	67	58	21
2	47	42	35
3	40	20	28
4	60	50	33
5	36	30	25
6	29	(20)	12



第21図 J-28・J-29号住居跡

2 土坑 (第22図)

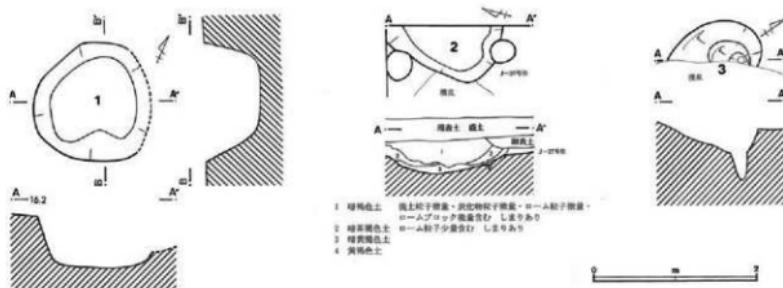
3基の土坑が検出された。

第1号土坑は調査区の中央で検出された。東側の一部が擾乱により失われている。形状は直径約1.5mのややいびつな円形である。確認面から底面までの深さは約65cmを測る。

第2号土坑は調査区の北東端で検出された。東側は調査区外へと続いており全体の規模は不明である。調査区内には南北約1.5m、東西約0.7mの範囲が位置する。確認面から底面までの深さは約20cmを測る。覆土は暗褐色～暗茶褐色を呈する。

第3号土坑は調査区の南側、J-29号住居跡に重複する箇所で確認された。南側は擾乱により失われており全体の形状は判然としない。残存部分は直径約1m相当の半円形である。最深部は半円の中心より北東側に寄っており、すり鉢状の土坑の底部にピットが伴う形状である。確認面からピット底面までの深さは約60cmを測る。

南中丸下高井遺跡



第22図 第3次調査土坑

第2節 遺物

1 住居跡出土遺物

J-26号住居跡 (第23図1~5)

住居跡から検出された土器の総量は46点、約610gである。

1は、深鉢形土器の胴部片である。地文として単節RL縄文が縦位に施されている。色調は黒褐色、胎土には微細な白色粒子が含まれている。時期は、中期後葉とみられる。

2・3は、加曾利E式の深鉢形の口縁部・胴部片である。2は、単節RL縄文が縦位に施された後、半裁竹管による蛇行懸垂文が施文される。色調は明褐色、胎土には白色粒子と赤色の砂礫が含まれている。3は、深鉢形の口縁部片とみられ、隆帯と沈線によって弧状の文様が施されている。色調は明褐色、胎土には白色粒子が含まれている。4は、大型の深鉢形土器の胴部片とみられる。地文としてLR縄文が斜位に施文された後、断面カマボコ状の隆帯が貼付されている。色調は暗褐色、胎土には白色の砂礫が含まれる。時期は、中期後葉の加曾利E式とみられる。5は、深鉢形土器の口縁部片である。隆帯と沈線による区画文が施される。中期後葉の加曾利E式に比定される。

J-27号住居跡 (第23図6~7)

J-27号住居跡より検出された土器は少量であり、出土量は全体でも14点、約190gであった。

6は、深鉢形土器の口縁部片である。口唇部は折返しによって肥厚し、やや外反する。隆帯による楕円形区画文が施された後、隆帯脇に幅広の押引き文、2本1組の波状沈線が施されている。色調は橙色で風化黒雲母と白色粒子が多量に含まれている。時期は、中期前葉の阿玉台II式に比定される。7は、深鉢形の口縁部で隆帯による楕円形区画文、隆帯脇に押引き文が施される。阿玉台II式に位置するとみられる。

J-28号住居跡 (第23図8~12)

堆積土中より、42点、約400gの土器片が検出された。

8~10は、中期前葉の阿玉台式土器である。8・9は、断面三角形の隆帯が貼り付けられた後、隆帯脇に角押文が施されている。10の胎土には、非常に多量の風化黒雲母が含まれている。時期は、阿

玉台 I b 式に比定される。

11 は、中期中葉の勝坂 2 式とみられる口縁部である。円筒形の深鉢とみられ、口唇部は面取りされ、角頭状である。細密な単節 R L 繩文が横方向に施された後、単沈線による弧線文が施文されている。色調は暗黄褐色、胎土には多量の風化黒雲母、白色粒子が含まれている。

12 は、中期中葉の勝坂 3 式とみられる口縁部～頸部片である。頸部を区画する太い隆帯が貼付され、その上に太い棒状工具による交互刺突文が施されている。胎土には、白色の砂礫が多量に含まれている。

J-29 号住居跡（第 23 図 13～19）

当住居跡から出土した遺物の点数も少量であるが、第 3 次調査の中では比較的に多いといえ、88 点、約 800g 程度の土器片が出土している。

13 は、中期前葉の阿玉台 II 式の口縁部片である。口縁部に隆帯による区画文が施されている。胎土には風化黒雲母が含まれている。14 は、勝坂 2 式の胴部片である。隆帯による三角形の区画文が施され、区画内にはキャタピラ文が施されている。色調は暗黄褐色、胎土には白色の砂礫が多量に含まれている。

15～17 は、勝坂 3 式に比定される深鉢形の口縁部～胴部片である。

15 は、大きく内湾する無文の口縁部と隆帯による梢円形区画文がめぐる胴部文様帶で構成される。隆帯上にはヘラ状工具による刻みや沈線、区画文内には沈線が施されている。色調は明褐色で胎土には白色粒子と風化黒雲母が含まれている。16 は、口唇部に隆帯が貼付されて肥厚する。隆帯が弧状に貼付された後、縦方向の沈線が施文されている。胎土には微細な風化黒雲母、白色の砂礫が多量に含まれている。17 は、ヘラ状工具による刻みの入った隆帯の貼付によって縦位に区画され、隆帯脇には沈線が施されている。

18 は、中期後葉の加曾利 E 1 式の口縁部片である。地文として、単軸絡条体 L の撚糸文が縦方向に施された後、隆帯による渦巻きつなぎ弧文が施されている。色調は明黄褐色、胎土には白色の砂礫が多量に含まれている。

19 は加曾利 E 2 式の胴部片である。地文として、単軸絡条体 L による撚糸文が縦方向に施された後、半裁竹管による直線懸垂文が施文されている。胎土には白色の砂礫が多量に含まれている。

第 18 表 第 3 次調査堅穴住居跡出土時期別集計表

遺構名	出土位置	重量(g)	点数	阿玉台			勝坂			加曾利E			中葉			後葉			中期			不明					
				Ib	II	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3		
J-26号住	P1	56	3			23	1													32	2						
	覆土一括	564	43	17	1	29	3	45	2	81	5	11	1	182	8	84	3						106	19	8	1	
J-27号住	P1	192	14		40	3		17	1								66	6	37	2	32	2					
	覆土一括	192	14		40	3		17	1								66	6	37	2	32	2					
J-28号住	P1	405	42	75	7	42	4	30	1								57	4			67	5	134	21			
	覆土一括	405	42	75	7	42	4	30	1								57	4			67	5	134	21			
J-29号住	P1	37	1																				37	1			
	覆土一括	784	67	12	1	104	6	103	4	100	6	19	1	27	3		33	3	54	4	159	10	173	30			

南中丸下高井遺跡

2 土坑出土遺物

1号土坑（第23図20～23）

土器（第23図20～22）

当土坑からは、113点、約1.5 kgの土器片と土器片錐1点が出土し、この内の107点、約1.4 kgの土器片が上層、もしくは堆積土一括として検出されている。

20は、下層より検出された深鉢形土器の口縁部片である。中空の把手の一部とみられ、円形の透かし孔が観察される。中期後葉の加曾利E2式に位置するとみられる。21は、上層より検出された胴部片である。刺突文が全面に施文されている。色調は明褐色、胎土には風化黒雲母が含まれている。中期中葉の勝坂2式に位置するとみられる。22は、堆積土中より検出された深鉢形土器の口縁部片である。単軸絡条体Lによる細密な撚糸文がやや斜行するように施され、口唇部には2本1組の沈線が横方向に施文されている。色調は明褐色で、胎土には堆積岩類とみられる砂礫が含まれている。連弧文土器2段階に比定される。

土製品（第23図23）

土器片錐が1点出土している。短辺3cm、長辺3.4cm、重量は10gである。土器の胴部片を加工しており、長軸方向に内湾している。長辺中央に紐掛け用の抉りが施されている。色調は橙色で胎土には微量の白色粒子と風化黒雲母が含まれている。時期は、胎土、色調等から中期後葉と考えられる。

第19表 第3次調査土坑出土土器時期別集計表

遺構名	出土位置	重量(g)	点数	前期				中期				後期				後期				その他				
				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	ⅩⅢ	ⅩⅣ	ⅩⅤ	ⅩⅥ	ⅩⅦ	ⅩⅧ	ⅩⅨ	ⅩⅩ	
1号土坑	下層	175	6							14	1					26	2					120	3	
	上層	187	12	18	1					1	1		14	2	18	2					66	2	42	3
	堆土一括	1213	94	63	4	48	1	177	6	17	1	74	6	50	2	70	5	114	6	302	23	281	40	
3号土坑	堆土一括	75	6	12	1					12	1	28	3	24	1									

3 遺構外出土遺物（第23図24～27）

土器（第23図24～26）

24は、深鉢形土器の胴部片である。断面三角形の隆帯が貼り付けられている。隆帶上には細かな刻みが施される。色調は暗黄褐色で胎土には微細な風化黒雲母が多量に含まれている。時期は、中期前葉の阿玉台II式とみられる。

25は、深鉢形土器の口縁部片である。口唇部には、隆帯が渦巻き状に巻き込まれた突起が施されている。口縁部には隆帯による重三角文が展開し、一部には外面に大きく突き出た突起が付されている。隆帶脇には三角押文、抉りによる三叉文が施されている。中期前葉の勝坂1式に比定される。

26は、深鉢形土器の胴部片である。地文として単節RL繩文が縦位に施された後、隆帯の貼付→隆帶脇の沈線の順に文様が描かれている。中期後葉の加曾利E2式に位置づけられる。

石器（第23図27）

遺構外より磨石が1点出土している。27は、砂岩製の円礫を利用しており、上下面が研磨されている。重量は114.9gである。

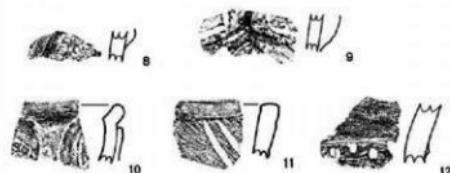
J-26号住



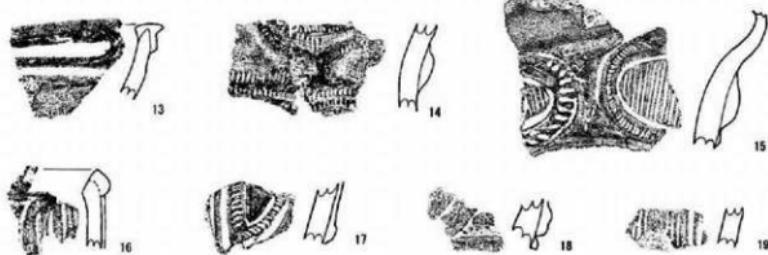
J-27号住



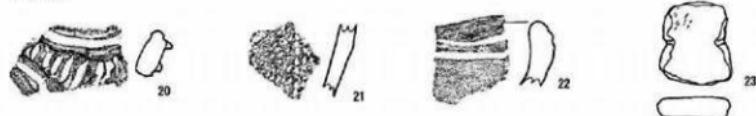
J-28号住



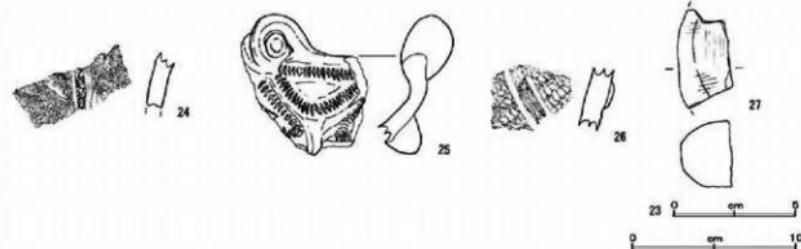
J-29号住



1号坑



遺構外



23 0 cm 0
0 cm 10

第23図 第3次調査出土土器・石器・土製品

第VI章　まとめ

平成 13 年に実施した確認調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡（H-4 号住居跡）が調査され、床面付近からは壺形土器や台付甕形土器、小型壺形土器、石皿などが多数の炭化材と共にまとった状態で出土した。隣接する第 1 次調査においても、同時期の竪穴住居跡が 2 軒確認されており（大宮市遺跡調査会 1988）、当該期の集落がより広い範囲に展開していたことが明らかとなった。

出土遺物で注目されるのは、土師器と共に出土した石皿である。閃綠岩の石材を用いて上下両面がよく研磨され、一見のところ、縄文時代の石皿と捉えられるが、見沼区深作稻荷台遺跡、大宮区北袋遺跡、西区 C-26 号遺跡をはじめ、周辺の事例でも弥生時代から古墳時代前期の遺構に伴う石器が確認されている（大宮市遺跡調査会 1987・1993・1994）。当該期においては、アワ・ヒエなどの製粉に石皿・磨石が使用され続けるとの指摘もあるように（浜田 1992）、本遺構出土の石皿・磨石は古墳時代前期の所産とみてよいだろう。またこの H-4 号住居跡からは、約 17 kg にも及ぶ多量の土器片が検出されたが、覆土中より出土した大半は縄文時代の土器や石器であった。出土した土器は縄文時代中期が主体であるが、前期初頭の花積下層式や前期後葉の諸磯 a 式、前期末葉の十三菩提式など様々な時期の土器片も混入している。第 2 次調査地点や第 3 次調査地点では前期の資料は非常に少なく、一方で第 1 次調査では前期諸磯 a 式や関山式期の竪穴住居跡が 5 軒のほか、遺物包含層からは同時期の資料が多数検出されていることから、確認調査地点周辺に前期の居住活動の中心があったことが推測される。

平成 22 年に実施した第 2 次調査では、縄文時代の竪穴住居跡が 3 軒、土坑 15 基、第 3 次調査では縄文時代の竪穴住居跡が 4 軒、土坑 3 基などが検出された。出土した土器の傾向から、時期はいずれも中期中葉勝坂式期から後葉加曾利 E 式期にかけてのものとみられる。第 1 次調査では、縄文時代中期中葉、もしくは後葉に位置づけられた竪穴住居跡は少なくとも 11 軒確認されており、当該期の竪穴住居跡は本報告と併せて計 18 軒を数える。第 1 次調査地点と第 2 次調査地点の距離は 100m 近く離れており、またいずれの調査地点においても当該期間の竪穴住居跡が高密度に分布していることから、南中丸下高井遺跡には大規模な中期環状集落が存在していたことがうかがえる。さいたま市内では、後晩期との複合集落跡である緑区の馬場小室山遺跡や同区鴨谷遺跡などが環状集落であることが知られている（さいたま市遺跡調査会 2009・2015）が、同様の規模をもつ本遺跡も中期の拠点的集落跡と推測される。第 1 次調査地点においては後期初頭称名寺式期の竪穴住居跡なども検出されており、縄文時代の前期・中期・後期、さらには古墳時代、平安時代と非常に長期間にわたって利用されていた本遺跡は、地理的な観点からも注目される。

出土遺物では、第 2 次調査地点、第 3 次調査地点より計 3 点の中層の土器片鍤が出土している。第 1 次調査地点でも中期とみられる 25 点の土器片鍤が確認されており、当地の縄文中期における主要な道具類の一つであったことが確認できる。一方で、武藏野台地や多摩丘陵で多数発見されている土器片加工円盤は 1 点もみつかっておらず、地域的な差異が顕著である。このことが生業活動や社会的機能と関わるものかは不明であるが、土器片加工製品の分布傾向に注意する必要があるだろう。

第 1 次調査、及び本報告の成果から、南中丸下高井遺跡の長期的な利用と集落としての拠点性がおよそ判明したといえる。平成 22 年に実施された第 4 次調査地点の調査においても多数の竪穴住居跡が検出されていることから、今後の報告を通じて本遺跡の実態はより明らかになるものと思われる。

【参考文献】

- 大宮市遺跡調査会 1987『北袋遺跡』大宮市遺跡調査会報告第19集
大宮市遺跡調査会 1988『南中丸下高井遺跡』大宮市遺跡調査会報告第23集
大宮市遺跡調査会 1993『C-26号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第41集
大宮市遺跡調査会 1994『深作稲荷台遺跡・A-137号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第44集
さいたま市遺跡調査会 2009『南方遺跡（第10次）・柄谷遺跡（第17次）』さいたま市遺跡調査会報告書第85集
さいたま市遺跡調査会 2015『馬場小室山遺跡（第32次）』さいたま市遺跡調査会報告書第163集
縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会 2016『縄文研究の地平 2016—新地平編年の再構築—』
浜田晋介 1992「弥生時代の石皿と磨石—南関東地域の事例からー」『考古論叢神奈河』第1集
神奈川考古学会
永瀬史人 2008「連弧文土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

南中丸下高井遺跡

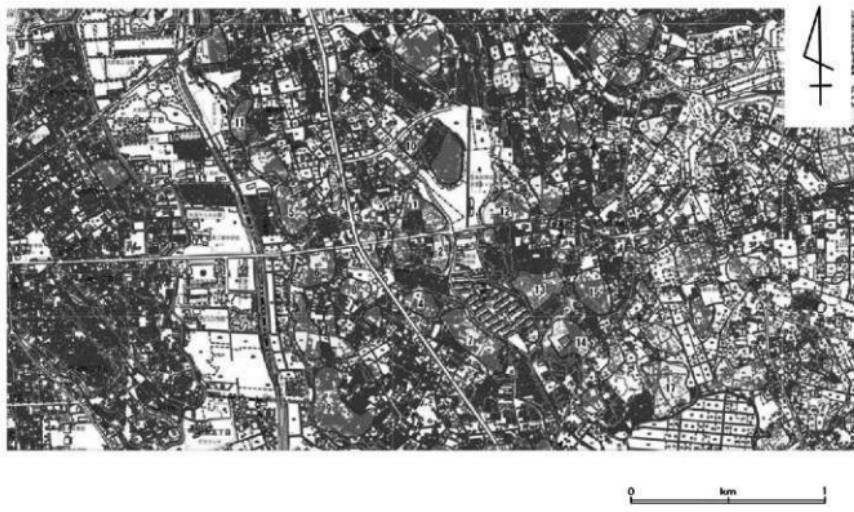
第2部

海老沼遺跡（第2次調査）

第I章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

平成23年4月、さいたま市見沼区大字南中野における個人専用住宅の建設にあたり埋蔵文化財発掘の届出が工事主体者よりさいたま市教育委員会教育長宛に提出された。当該地については届出提出前の平成22年10月14日に確認調査を実施しており、縄文時代の住居跡状遺構、土坑、縄文時代中期の土器を検出した。これらの遺構・遺物の現状保存が可能か否かの協議を実施したところ、予定される工事では発見された遺構・遺物の保存に影響を及ぼすことが明らかであった。そのため、依頼を受け、さいたま市教育委員会が工事に先立って、記録保存のための発掘調査を平成23年5月6日から同年5月20日まで実施した。



- 1 海老沼遺跡 2 海老沼南遺跡 3 A-65号遺跡 4 南中野諏訪遺跡 5 南中丸下高井遺跡 6 中川貝塚 7 南中野諏訪北遺跡 8 南中野諏訪遺跡 9 中川八幡遺跡 10 春日氏館跡 11 A-69号遺跡 12 南中野遺跡 13 御藏山中遺跡 14 鎌倉公園遺跡 15 御藏富士見台II遺跡 16 高見北遺跡 17 篠山遺跡

第24図 遺跡の位置

第2節 調査の方法と経過

1 方法

今回の調査は個人専用住宅建設に伴うもので、住宅建設部分のうち確認調査により遺構が確認された範囲を中心に調査区を設定し、調査を実施した。排土の処理の関係で、北側を1区、南側を2区として調査を実施することになった。重機により表土を除去した後、人力により遺構確認を行い、引き続き遺構調査を実施した。遺構の平面測量は平板測量により実施した。

2 経過

発掘調査は平成23年5月6日から同年5月20日まで実施した。

平成23年5月6日、調査区を南北に2分割し北側を1区、南側を2区とし、北側の1区の表土除去を実施。その後、機材の搬入を行う。5月9日、作業員により調査を開始する。調査区の精査を行ったところ、北端で東西方向の溝、調査区中央西側で住居跡状の遺構を確認した。住居跡は東西方向のベルトを設定し覆土の除去を実施。この住居跡を第1号住居跡とする。また、併せて溝の調査も行った。溝を完堀した。5月10日、第1号住居の遺物の取り上げを行う。遺物取り上げ後、住居跡の土層図を作成。第1号住居内で検出されたピット・土坑の調査を開始する。調査区北壁の土層図を作成する。5月11日及び12日、雨天中止。5月13日、第1号住居の調査を継続する。土層確認ベルトの除去と土坑の調査を行う。調査区際の住居内中央付近で焼土の集中した箇所が検出された。炉跡と思われる。平板測量により溝と住居の測量を行う。5月16日、1号住居の調査を継続し、炉跡の調査を行う。炉は調査区外に伸びており、その半分を調査することができた。引き続き住居外ピットの調査も行った。5月17日、写真撮影を行い、1区の調査を終了する。引き続き重機により反転作業を行った。5月18日、2区の調査を継続する。調査区中央で検出された土坑とピットの調査を行った。5月19日、2区の調査を継続する。平板測量により平面図を作成した。5月20日、重機により埋め戻しを行い、機材の撤去を行い、現地調査を終了する。

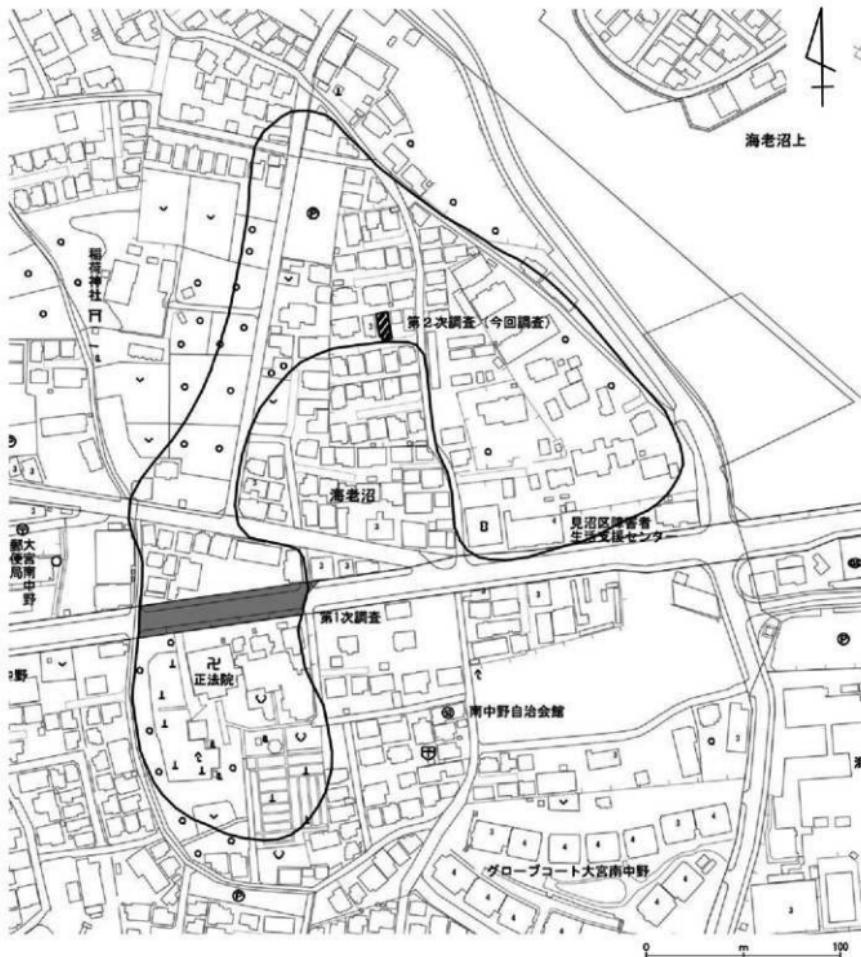
第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

海老沼遺跡は、さいたま市の東部、見沼区大字南中野字海老沼地区内に所在し、大宮台地の芝川と練瀬川の間に連なる大和田片柳支台に位置する。遺跡付近は、大宮駅より東へ約2.9km程の市街化区域内である。第2産業道路より約230m東に位置する。近年、市街化が進んでおり、住宅街となっている。周辺の遺跡としては北側に南中丸遺跡が、南側では海老沼南遺跡がある。

本遺跡ではこの調査は2回目の調査であり、前回の調査は県道新方須賀・さいたま線の工事に先立って発掘調査が行われ、縄文時代後期の住居跡や平安時代の住居跡が確認された。

大宮市遺跡調査会 1987年『A-64号遺跡（大宮都市計画道路3・4・4中央通線』大宮市遺跡調査会報告 第18集

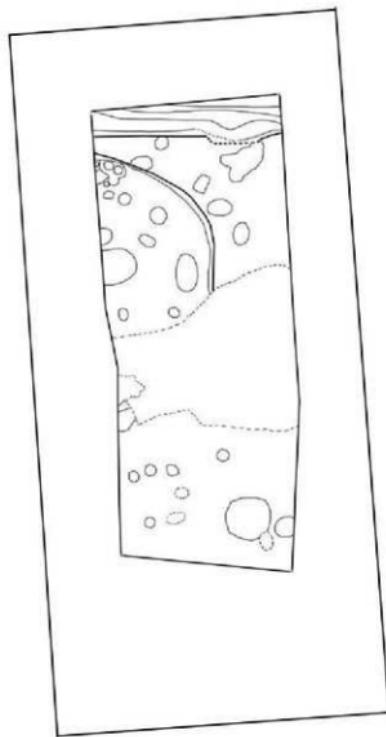


第25図 発掘調査の位置図

第2節 調査区の概要

今回の調査は個人専用住宅建設に伴うもので、住宅建設範囲で確認調査により遺構が検出された部分を中心として調査範囲を設定し、発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代の住居跡1軒、土坑3基、ピット20基、溝1条及び遺物包含層が検出された。遺物は、縄文時代前期、中期、後期の土器・石器が、18

リットル入り遺物収納容器 1 箱分出土した。



4

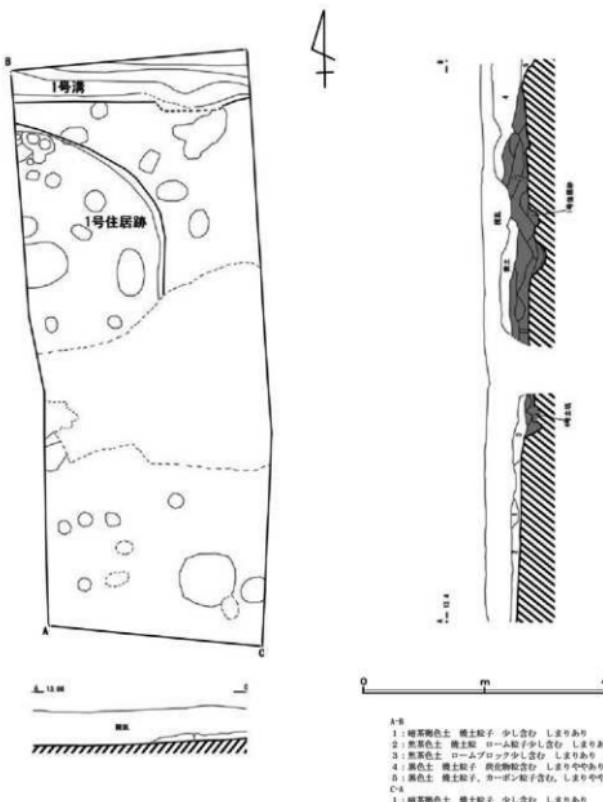
市道



第26図 調査区の位置

第三章 遺構と遺物

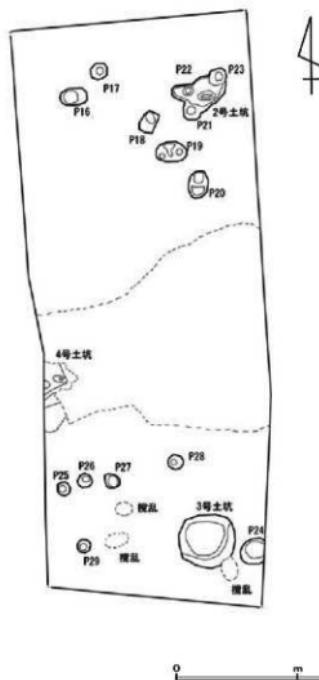
今回の調査区の基本土層は、地表面下20~80cmまで表土（一部攪乱を受けている）、北側1号住居跡の上15~20cmまでが表土（第27図）、南側で3層の包含層が堆積していた。包含層は10cmの遺物包含層（第27図1）、10cmほどの遺物包含層（第27図2）、10~15cmの包含層（第27図3）の1層である。最下層でローム面が確認された。縄文時代の住居跡1軒、土坑4基、ピット27基が検出された。



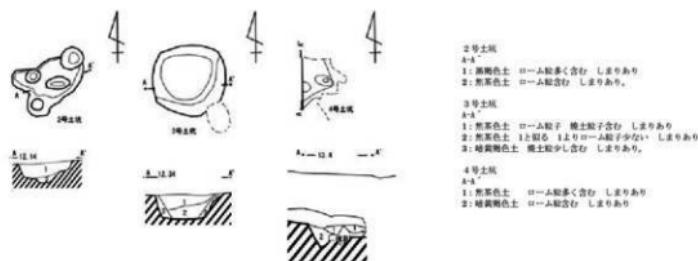
第27図 全測図及び全土層図

第1節 第2面検出の遺構と遺物

ローム層上面を第2面とした。第2面上で検出された遺構は土坑3基、ピット14基である。



第28図 第2面検出の遺構



第29図 土坑

2 ピット

全部で14基、検出面（確認面）はローム層上面である。P19及びP24から文様がはっきりしない土器片が

ごく少量出土している。その他のピットから遺物は出土していない。ピットについては、Pと表記する。

例）ピット1はP1と表記した。

第20表 ピット計測表

単位 cm 深さは確認面よりの深さ

No.	長径	短径	深さ	No.	長径	短径	深さ	No.	長径	短径	深さ	No.	長径	短径	深さ
16	45	35	25.8	20	48	23	64.6	24	43	42	4	28	25	24	14
17	38	25	73.8	21	15	15	37.5	25	22	22	20.2	29	20	20	9.4
18	39	25	63.6	22	17	17	18.2	26	24	23	41.5				
19	54	33	14	23	30	27	39.9	27	23	22	31.4				

第2節 第1面検出の遺構と遺物

遺物包含層面上で確認された面を1面とする。

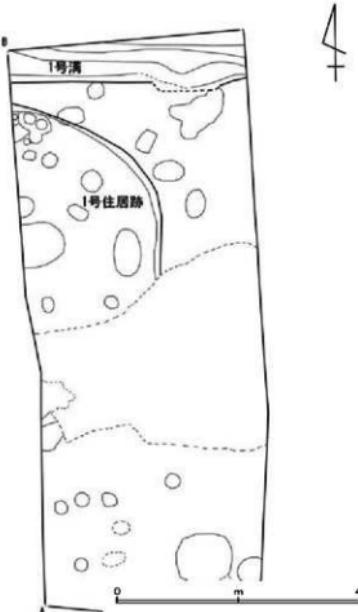
第1面上で検出された遺構は住居跡1軒、溝1条、住居跡内ピット13基である。

1 第1号住居跡（第31図）

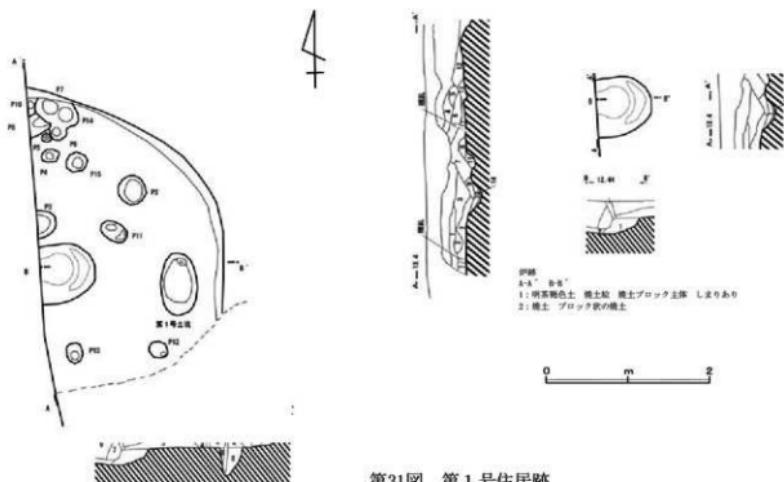
調査区東側で検出した。一部調査区域に延び、南側が擾乱を受けている。遺構の残存率は4割程度である。外に伸びる円形のプランを示すものと考えられる。長軸3.75m、短軸2.24m、確認面からの深さは約16～20cmで、底面は平坦である。

1号土坑及び炉を伴う。覆土からは焼土粒が検出され、床面直上からは炭化物粒も確認された。壁はほぼ垂直に立ち上がっていいる。

出土した遺物は縄文時代後期初頭称名寺式土器の大型破片が出土しているため、本住居跡の時期は縄文時代後期初頭称名寺式期に比定される。



第30図 第1面検出の遺構



第31図 第1号住居跡

A-A' : 基盤

1: 黒茶色土 ローム粘子含む しまりあり

2: 黒褐色土 粘土層多く含む しまりあり

3: 黑茶色土 粘土層多く含む しまりあり

4: 黑茶色土 ローム層多く含む しまりややあり

5: 黑茶色土 ロームブロック含む しまりあり

6: 黑茶色土 ロームブロック 粘土層多く含む しまりあり

7: 黑茶色土 ローム粘土層多く含む しまりあり

8: 黑茶色土 粘土層多く含む しまりあり (1号土塹)

9: 黑茶色土 粘土層多く含む しまりあり (2号土塹)

10: 黑茶色土 粘土層多く含む 粘土ブロック土塹 しまりあり (3号土塹)

11: 黑茶色土 粘土層多く含む しまりあり

12: 黑茶色土 ロームブロック ロームブロック多く含む しまりあり

13: 黑茶色土 粘土層多く含む ロームブロック少しある

14: 黑茶色土 ブロック状の粘土 (4号土塹)

B-B' : 基盤

1: 黑褐色土 ローム粘子多く含む しまりややあり

2: 黑茶色土 粘土層多く含む しまりあり

3: 黑茶色土 粘土層多く含む ローム粘子含む しまりあり

4: 黑茶色土 粘土層多く含む ローム粘子含む しまりあり

5: 黑茶色土 モト原ら (4号土塹) ローム粘子含む しまりあり

6: 黑茶色土 ローム粘 粘土層少しある しまりあり (5号)

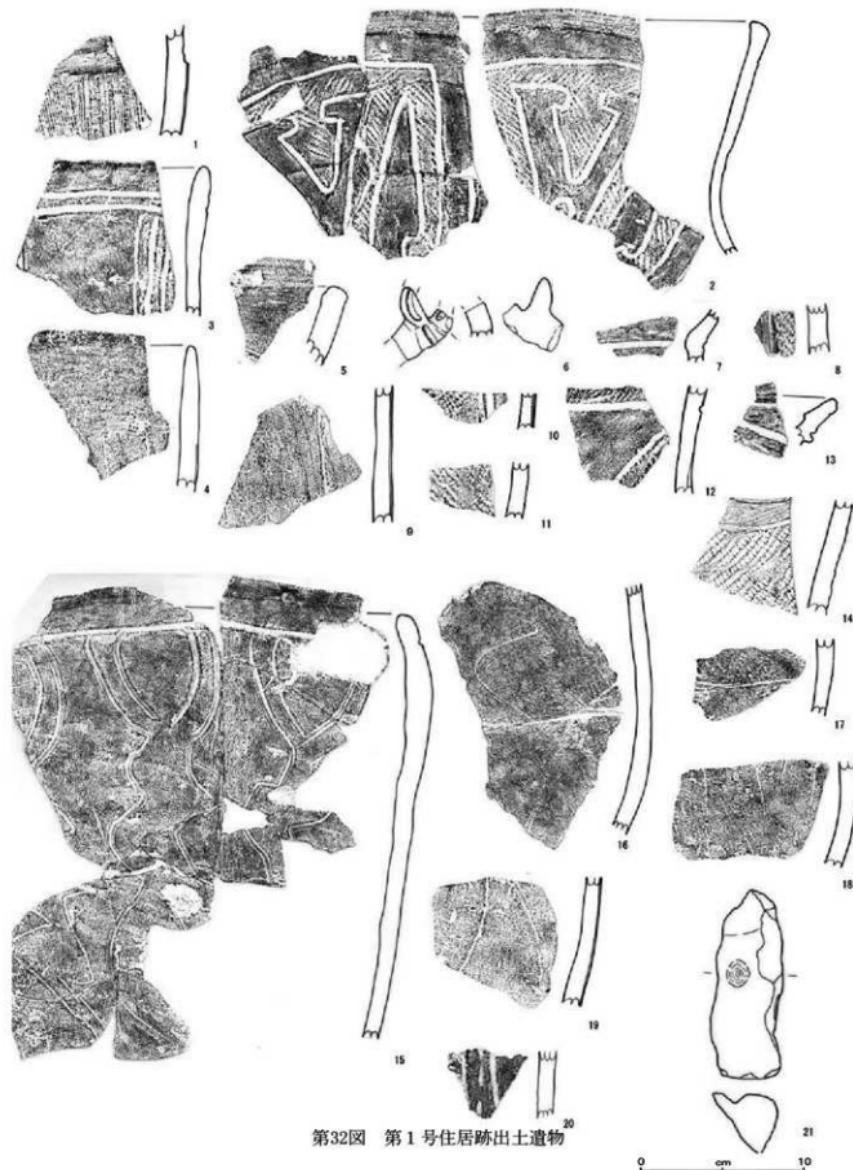
7: 黑茶色土 粘土層少しある しまりあり (6号)

8: 黑茶色土 粘土層少しある しまりあり (7号)

9: 黑茶色土 粘土層少しある しまりあり (8号)

2 第1号住居跡出土遺物 (第32図)

1は深鉢胴部の破片であり、太い沈線が横走。沈線文の下位に細い櫛状の文様が施される。縄文時代中期後葉、加曽利E式土器である。2から5は深鉢の口縁部の破片である。6から14は深鉢胴部の破片である。2は繩文が施された中にVの字に似たような沈線文が施されている。一部赤彩が塗られている。2は沈線文が縦横に施される。4は沈線文が微量に施される。5は無文。6は口縁部又は胴部に付随する装飾把手である。7は沈線文が施される。外反する。頸部と思われる。8は上下に沈線、区割りに繩文が施される。9は沈線文が縦走する。10は繩文が施され、隆帶文が施される。11は繩文が施される。12は繩文が施され、磨り消され沈線文が施される。13は隆帶文と並行して沈線文が施される。14は沈線文の下部に繩文が施される。15は深鉢の口縁部から胴部の破片であり、外側に波を描くような沈線文、その内側に逆Uの字の沈線文が施される。16から20は深鉢胴部の破片である。17は波線のような沈線文が施される。一部煤がついており黒くなっている。15と同一個体と考えられる。17か19は細い沈線文が施される。20は2本の沈線文の中間に烈点の沈線文が施される。21は石皿の一部である。2から19は縄文時代後期、称名寺1式土器、20は称名寺2式土器であると比定される。



第32図 第1号住居跡出土遺物

第1号住居跡内ピット（第22表）

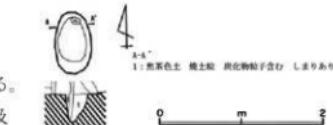
全部で13基、これらは第1号住居跡内、検出面は包含層内で確認された。これらは住居の柱穴と考えられる。これらのピットから遺物の出土はない。

第21表 第1号住居跡内ピット計測表

No.	長径	短径	深さ	No.	長径	短径	深さ	No.	長径	短径	深さ	No.	長径	短径	深さ
2	35	35	9.2	6	22	20	8.3	10	20	7	3.1	14	35	25	26.1
3	23	17	13.6	7	50	37	8.1	11	35	23	10.3	15	27	25	17.5
4	22	15	36.5	8	30	25	9	12	25	18	12.1				
5	10	10	14.9	9	欠番			13	25	20	16				

3 第1号土坑（第33図）

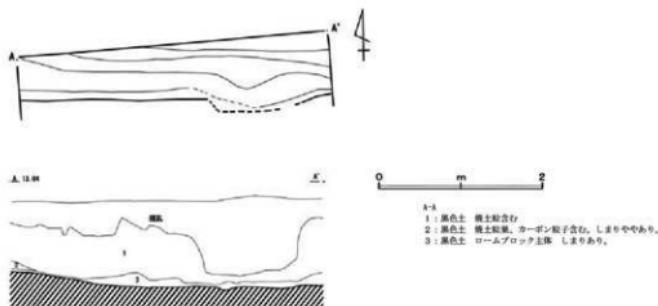
1号住居跡内で検出したもので、椭円形のプランを呈している。長軸75cm、短軸45cm、確認面からの深さは約22cmである。覆土は焦茶色土の1層のみで焼土を含む。遺物は無文の土器及び文様が明確ではない土器が出土している。



第33図 第1号土坑

4 第1号溝（第34図）

調査区北側で検出した。北、東、南方向へ一部調査区域外に伸びる直線状のプランを示すものと考えられる。調査区を横断しており、確認できる全体の長さが8.5m、幅が78cm、深さは62~85cmである。焼土粒を多く含んでいる。東側の一部が大きく擾乱を受けている。遺物は縄文時代の土器が少量出土した。



第34図 第1号溝

5 第1号溝出土遺物（第35図）

22及び23は深鉢口縁部の破片、輪積みの跡がみられる。
24は深鉢胴部破片で薄く、無文である。1号溝から出土した土器は僅かであり、文様がはっきりしないものがほとん
であるため、1号溝の時期は不明である。

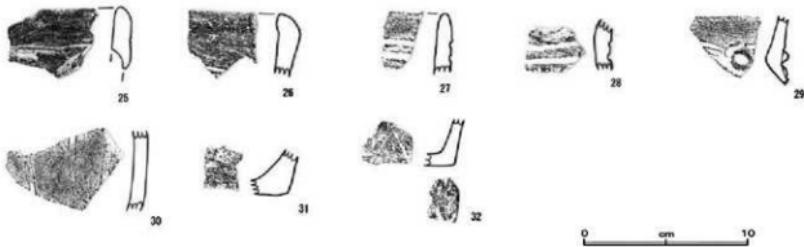


第35図 第1号溝出土遺物

第3節 その他の遺物

1 包含層出土遺物（第36図）

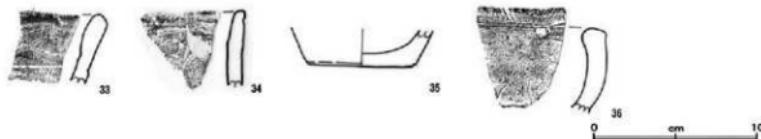
25及び26は深鉢口縁部破片、口縁部を区割りする沈線文が横走する。27及び28は2本の平行する沈線文
が施される。29は沈線文が施される。円形のボタン瘤が貼り付けられている。30は深鉢胴部破片で、沈線
文が縦に施される。31は深鉢底部の破片であり、無文である。32は深鉢底部の破片であり、不規則な櫛状
の沈線文が施される。



第36図 包含層出土遺物

2 遺構外出土遺物（第37図）

33は深鉢口縁部の破片であり、細い沈線文が横走する。34は深鉢口縁部の破片であり、2本の不規則な沈線文が施される。35は深鉢底部の破片であり、底部は直径7センチと推定される。無文である。36は土師の口縁部の破片であり、釉薬が塗られている。内湾する。



第37図 遺構外出土遺物

第 3 部

真福寺貝塚（K地点・平成29年度調査）

1 調査の目的

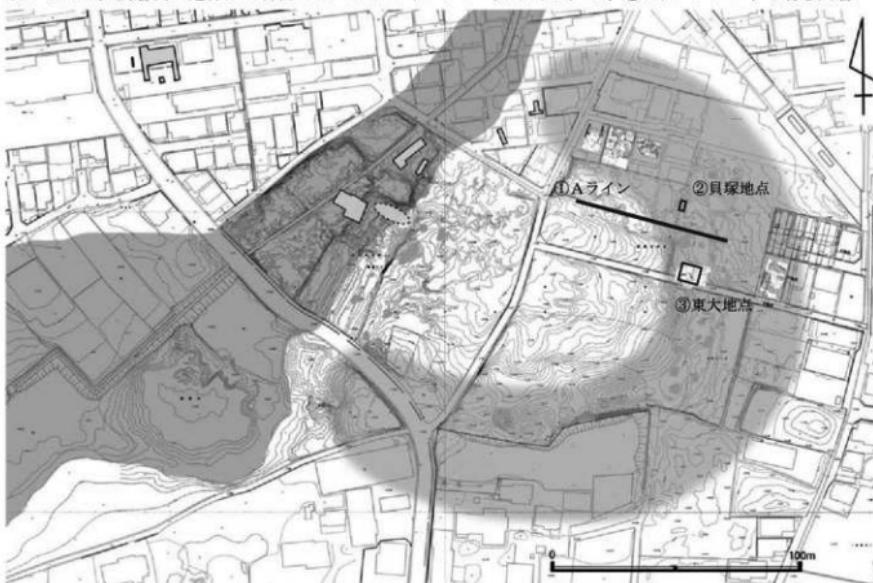
今後史跡を活用していくうえで必要な、遺跡の現在の保存状況や、遺跡の構成要素である貝塚や住居跡をはじめとする各種遺構の分布状況等の詳細な情報を収集することを目的として、平成28年度から開始した調査の2年目にあたる。この28年度から開始した調査は、遺跡東側の主に貝塚や住居跡等が分布する居住域と目される「高まり」周辺の様相を3ヶ年で明らかにしていくことを目的に計画されたものである。

そのため今年度は、昨年度に引き続き、高まりで検出した貝層及び遺物包含層の調査と、新たに3ヶ所調査区を設け、遺構の面的な広がりや、高まり内側に所在し、西側の泥炭層地点まで広がる崖地内の様相を明らかにするための調査を実施した。

2 平成29年度調査の概要

（1） 調査の位置

調査の位置は、①史跡指定地東半部の「高まり」が最も良好に保存されている部分を中心に平成28年度に選定したAラインの高まり部分1m×30mのトレーニチに、今年度は新たに平成28年度の調査トレーニチ西端から30m泥炭層側に延伸した合計1m×60mのトレーニチ（Aライン）と、②Aトレーニチの中で最も貝層



第39図 調査区の位置

真福寺貝塚

の堆積が良好に残されていた地点の北側に設定した東西2m×南北4mの調査区（貝塚地点）、そして、③Aトレーナー南側に位置し、現在「国史跡 真福寺貝塚」の石碑が建つ西側で、かつて東京帝国大学が昭和15年に調査を行った貝層地点について、東西9m×南北7mの調査区を設定し（東大地点）、合計3か所で調査を実施した。

（2） 調査の経過と方法

調査は平成29年6月28日～12月26日まで実施した。発掘調査は、表土剥ぎと埋め戻しの一部に重機を使用したが、基本的には人力で行った。調査に先立ち基準点測量を中央航業株式会社に委託して調査区の設定を行った。調査は窪地内に堆積する土層が最も新しい包含層であるとの予測にたち、泥炭層に最も近い西端から高まり側に向かって調査を進めた。

包含層の掘削は、調査区北側に幅20cmのサブトレーナーを設定し、下層から色調の異なる包含層を検出した面で一度掘り下げるのを止め、調査区全面をその面まで掘り下げて遺構確認をするという一連の作業を一単位として、ローム面までこれらの作業を繰り返しながら調査を行った。

遺物の取り上げは、高まり及び窪地の堆積時期や時期毎の詳細な遺構分布範囲を把握することを目的として、1mグリッドを設定し遺物の取り上げを行った。そして、遺物がブロック状あるいは面上に集積する状況が確認された場合は、それらの原位置を記録して取り上げを行った。

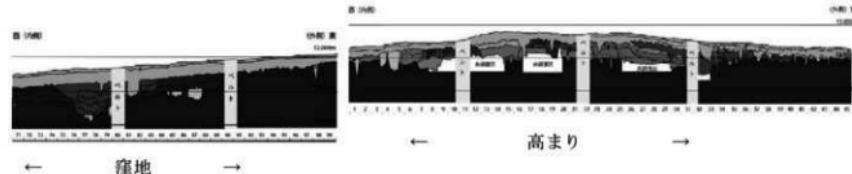
なお貝層の調査では1mグリッドをさらに50cm×50cmの小グリッドに4分割し、5cm単位で掘り下げを行った。そして次の取り上げ単位に進む前に、貝層の堆積状況や遺物の包含状況の所見をまとめ、さらに土器や石器、獸魚骨等の遺物の出土位置を記録しながら調査を行った。そして貝層資料はすべて土のう袋にて全量回収した。

（3） 調査区の概要

Aライン（窪地内）

晩期中葉安行3d式を主体とする遺物包含層を2枚検出した。上層は黒色土層で焼けた獸骨片を多く含む。下層の暗褐色土層も、同じく焼けた獸骨片を伴う。出土する遺物は、上層は安行3d式主体で、下層になると安行3d式の中に安行3c式が多く含まれる傾向が見られた。両層とも遺物量は多く、中形破片が調査区内に面上に集積する状況が各層数面にわたり確認された。

また調査区西側では、晩期中葉の包含層を掘り込む平安時代の竪穴住居跡を検出した。西側の住居壁面と東側のカマド付近の床面からそれぞれ完形・半完形の須恵質土師器と土師器を4点検出した。いずれも灯明皿として転用された痕跡があり、そのうち土師器の1点は外面に墨書きを伴っていた。



第40図 Aライン北壁土層模式図

なお、晩期中葉の遺物包含層は、高まり側に向かって堆積が薄くなり、平成28年度調査区の西端から高まりに近接する窪地東端までの10mの間は、包含層が堆積しておらず、厚さ約25~40cmの表土層の直下からローム層を検出した。この範囲のローム面からは遺構の検出が少なく、その範囲から高まり側に向かって包含層の堆積と土坑およびピット等の遺構の構築が確認された。

そして窪地が立ち上がりを見せる窪地縁辺部付近の暗褐色土層の直下から、隅丸長方形と楕円形の2基の土坑を検出した。これらの土坑はいずれも北西から南西方向に長軸を揃え、近接した位置関係を保っていた。この2基の土坑のうちの1基からは安行3c式の複数個体分の大形破片が出土し、もう1基の西端からは安行b~3c式の1個体分の大形破片が出土した。両土坑から出土した大形破片はいずれも内面を上に向けて検出された。

Aライン（高まり）

高まりの西端に相当する位置から晩期中葉安行3b~3c式を主体とする複数の土坑、ピットを検出した。そのうちの1基の土坑からは、炭化した堅果類を複数検出した。

貝層はこれら晩期の土坑、ピットを検出した地点から約3m東側から高まり頂部に向かって堆積していた。貝層の時期は、堀之内2式、加曾利B1~2式、安行1式期を主体とする。貝層の堆積は各時期で異なっており、後期前葉堀之内2式はマガキ主体のブロック状の貝層、後期中葉加曾利B1式期はヤマトシジミ主体の面的な貝層、そして後期後葉安行1式期のものはピット内貝層であった。

なおこれら貝層の堆積は、高まりの頂部周辺から西側にかけて堆積しており、遺跡外側へ向かって傾斜する高まり東側には貝層の堆積見られなかった。そして高まり東側では、後期後葉安行1式~晩期中葉安行3c式期の黒色土層を主体とする複数枚の遺物包含層が累積して堆積する様相を確認した。なお本地点の黒色土層を主体とする遺物包含層からも、窪地内の黒色土層と同じように焼獸骨片が多量に出土した。そして、約5mの範囲で堆積していた後期後葉の黒色土層の東側と西側縁辺部の下の層からは、焼土跡が検出された。

貝塚地点

Aラインの北5mの位置にあり、表土下約20cmで貝層上面を検出した。貝層はヤマトシジミ主体で、表土中および貝層上面からは、後期後葉安行1式土器が多く出土した。ヤマトシジミ以外の貝種としては、鹹水種であるハマグリが目立つが、本地点の南側にあるAラインの貝層と比較して、鹹水種であるシオフキが多く見られた。なお貝層の広がりとして、調査区北側で貝の密度が薄くなり、貝層は調査区北側には広がらないことを確認した。

東大地点

本地点は昭和15年に東京帝国大学が調査した第3地点の再発掘を目的に調査を行った。今年度は、表土を約20cmまで掘削するにとどめたため、過去の調査区の範囲は確認できなかった。表土中からは後期中葉加曾利B1~2式と後期後葉安行1式が多く出土し、他の時期の遺物の出土は少なかった。出土した貝はヤマトシジミ主体で、ハマグリ、オオノガイ、獸骨片を伴う。

(4) 発掘調査の成果と課題

今回の調査で出土した遺物は、18リットル入りコンテナに換算して61箱であった。

今年度は高まり内側の窪地内を調査した結果、新たに晩期中葉安行3d式を主体とする黒色土層の堆積と直下に安行3b～3c式期の墓壙と思われる土坑を2基検出した。この2基の土坑はいずれも長軸が同じ方向を向いており、周囲に同規模の土坑が隣接して分布する可能性が想定される。県内では加須市長竹遺跡や白岡市前田遺跡等で同時期の土坑が、本遺跡とほぼ同じ位置に相当する、高まりの内側から密集した状態で確認されており、墓域としての性格が想定されている。ただし今回の調査は幅1mという限られた調査に基づく推定であり、今回検出した土坑の周間に墓域が広がっているかは追加調査等によるさらなる検証が必要であろう。

また窪地内からは、平安時代の住居跡が1軒確認されたことにより、縄文時代以降の真福寺貝塚の土地利用状況の変遷を語るうえで新たな情報を得ることができた。

そして高まりに堆積する貝層については、細別型式単位で後期前葉塚之内2式～後期後葉安行1式期にわたる、時期毎の高まり内での分布や詳細な堆積状況を把握することができた。

ただし、今年度の貝層調査は、調査区北側のみを掘り下げただけで全ての取り上げを完了していない。また貝層西端で確認した後期前葉のマガキ主体の貝層も、上面の検出のみで今年度の調査を終了した。したがって次年度は、今回の調査によって明らかとなった貝層の断面を生かし、貝層の廃棄単位に留意しつつ、貝層の時期や分布範囲を追検証するための調査を実施していく予定である。



(1) H-4号住跡発掘状況（南東→）



(2) 調査風景（北西→）



(3) H-4号住跡炭化材出土状況（南西→）



(4) H-4号住跡遺物出土状況（東→）



(5) H-4号住跡遺物出土状況（南→）

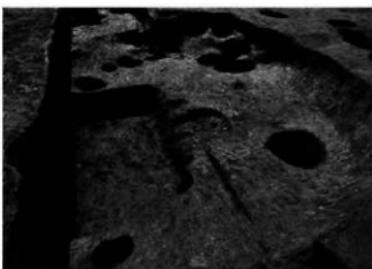
南中丸下高井遺跡（第2次調査） 図版－2



(1) 第2次調査地点完掘状況（北→）



(2) 調査風景（東→）



(3) J-23号住居跡完掘（北→）



(4) J-23号住居跡覆土堆積状況（南東→）



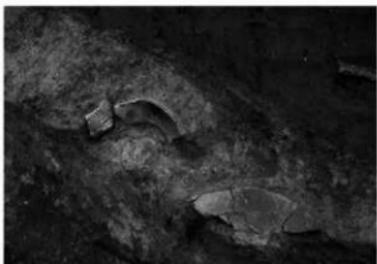
(5) J-23号住居跡遺物出土状況①



(6) J-23号住居跡遺物出土状況②



(7) J-23号住居跡遺物出土状況③



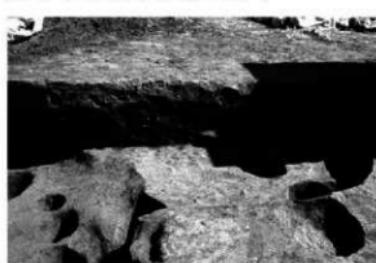
(8) J-23号住居跡炉内出土土器（北→）



(9) J-23号住居跡炉検出状況（北→）



(10) J-24号住居跡完掘（北→）



(11) J-25号住居跡完掘（南西→）



(12) J-25号住居跡埋甕（上面→）



(13) J-25号住居跡埋甕（南西→）

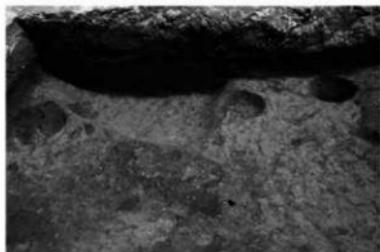
南中丸下高井遺跡（第3次調査） 図版－4



(1) 第3次調査地点A区完掘（東→）



(2) J-26号住居跡・J-27号住居跡（南西→）



(3) J-27号住居跡（南西→）



(4) 第3次調査地点B区完掘（南東→）



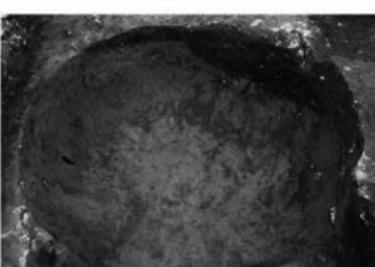
(5) 調査風景（北東→）



(6) J-28号住居跡（北西→）



(7) J-28号住居跡・J-29号住居跡（手前）（南西→）



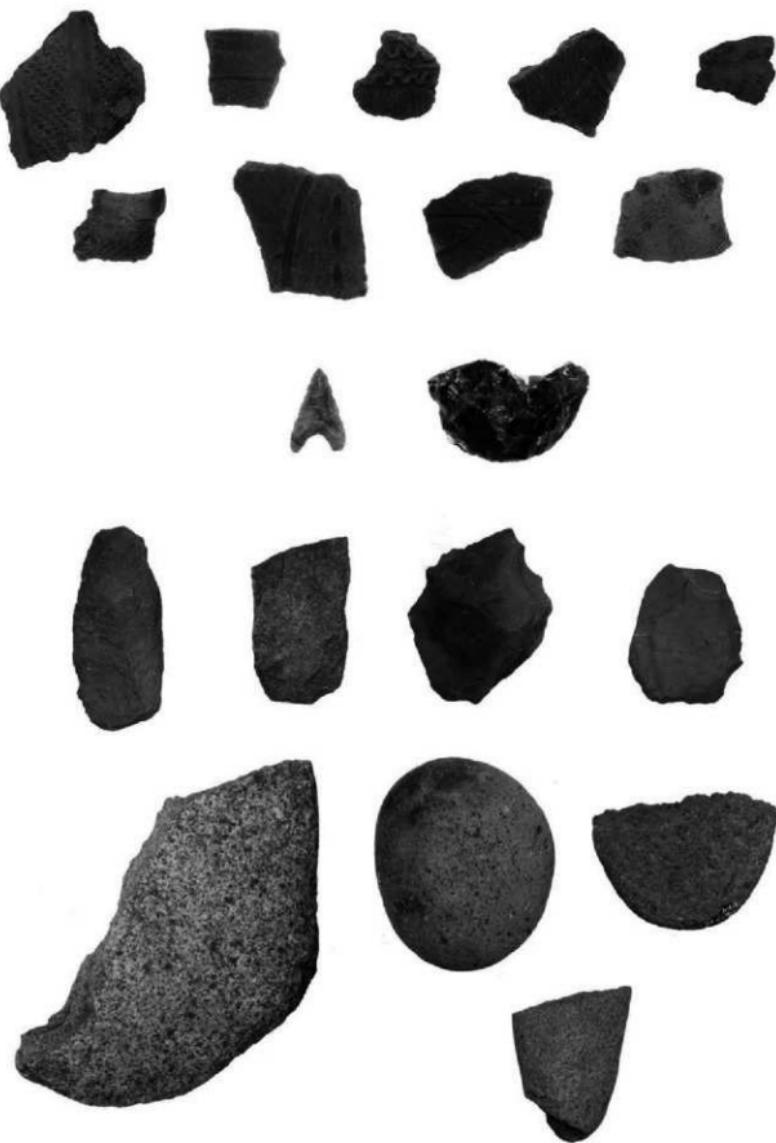
(8) J-29号住居跡内ピット1（南→）

南中丸下高井遺跡（遺跡範囲確認調査） 図版－5



(1) H-4号住居跡出土土器（1）(第6図1～10、第7図11～26)

南中丸下高井遺跡（遺跡範囲確認調査）図版－6



(2) H-4号住居跡出土土器 (2)・石器、遺構外出土石器 (第7図 27~37、第8図 38~45)

南中丸下高井遺跡（第2次調査）図版—7



(1) J-23号住居跡出土土器(1) (第15図1~15、第16図16~18)

南中丸下高井遺跡（第2次調査）図版－8



(2) J-23号住居跡出土土器(2)・J-24号・J-25号住居跡出土土器(第16図19~28、第17図1~20)

南中丸下高井遺跡（第2・3次調査）図版一9



(1) 第2次調査出土石器・土製品・石製品、第3次調査出土土器・石器・土製品（第18図1～13、第23図1～27）

海老沼遺跡（第2次調査） 図版-10



(1) 1区全景



(2) 2区全景



(1) 調査状況



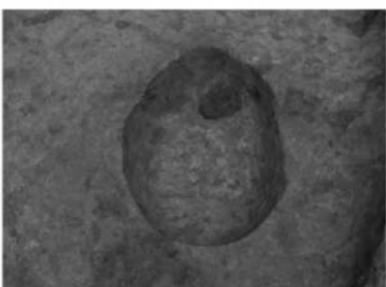
(2) 第1号住居跡



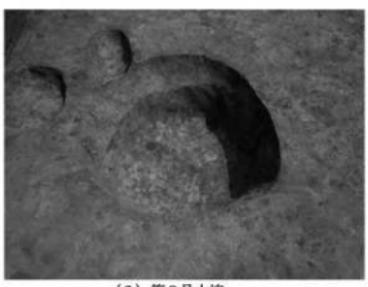
(3) 第1号住居跡出土土器



(4) 第1号住居跡の炉跡

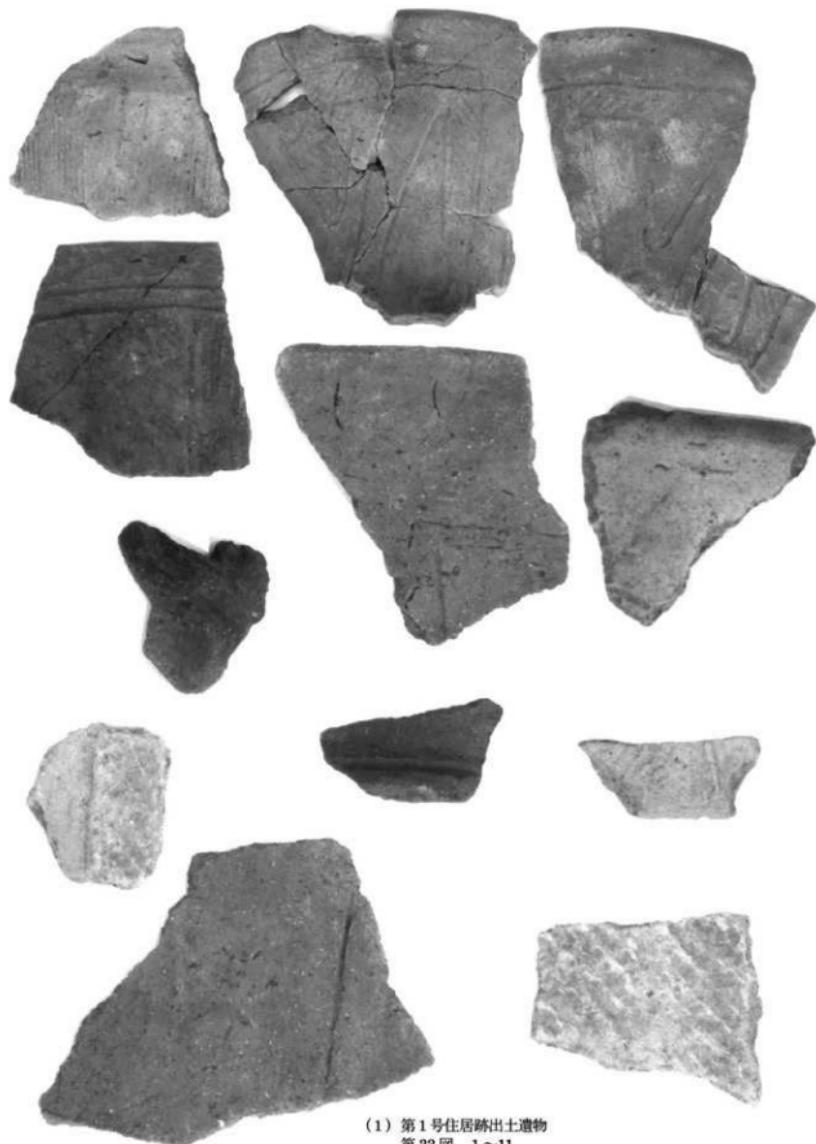


(5) 第1号土坑

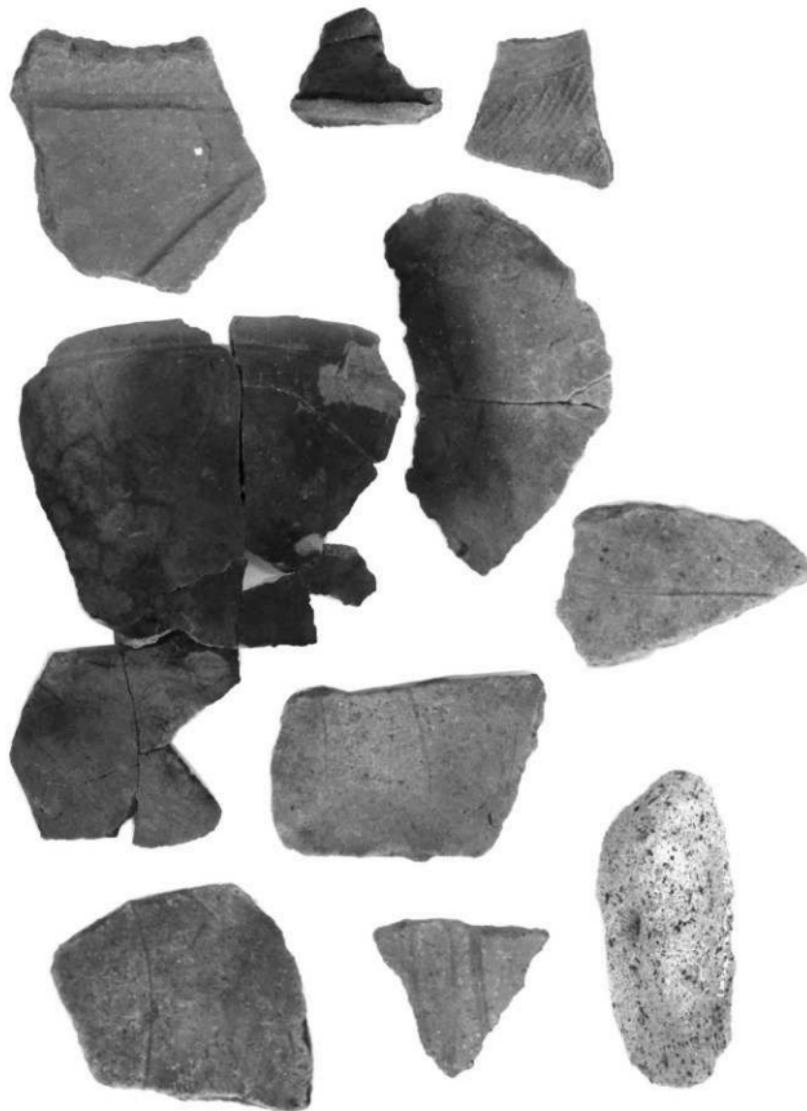


(6) 第3号土坑

海老沼遺跡（第2次調査） 図版-12



(1) 第1号住居跡出土遺物
第33図 1~11



(1) 第1号住居跡出土遺物
第33図 12~21

海老沼遺跡（第2次調査） 図版-14





(1) 調査区全景（東から）



(2) 平安住居遺物出土状況（西から）

(3) 平安住居完掘状況（西から）

図版-16 真福寺貝塚（K地点・平成29年度調査）



(4) 平安住居カマド付近遺物出土状況（西から）



(5) 平安住居西壁遺物出土状況（東から）



(6) 窪地内調査区西壁（東から）



(7) 窪地内調査区東壁（西から）



(8) 窪地内遺物検出状況（東から）



(9) 窪地内遺物出土状況（南から）



(10) 埋地内遺物出土状況（南西から）



(11) 埋地内遺物出土状況（北東から）



(12) 埋地内墓壙検出状況（南から）



(13) 埋地内墓壙検出状況（西から）

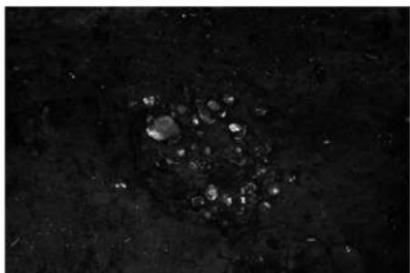


(14) 高まり西側裾部調査区東壁（西から）

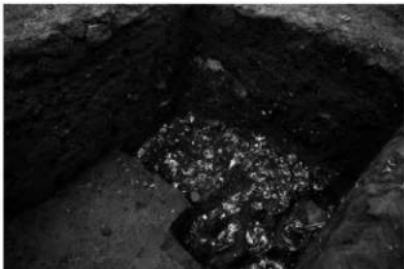


(15) 高まり西側裾部晩期土坑（西から）

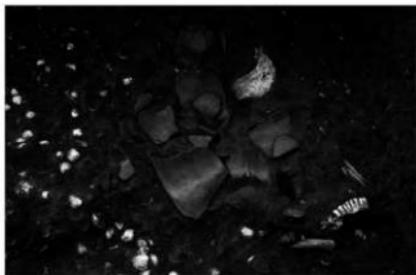
図版-18 真福寺貝塚（K地点・平成29年度調査）



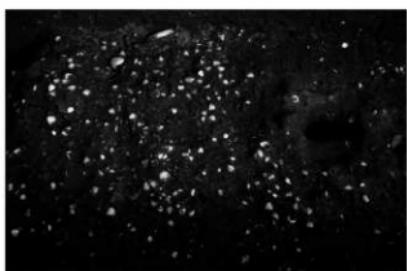
(16) 高まり内ビット内貝屑（北から）



(17) 高まり内マガキ貝屑（南西から）



(18) 高まり内貝屑遺物出土状況（北から）



(19) 高まり内ヤマトシジミ貝屑（南から）



(20) 高まり東側遣構検出（西から）



(21) 東大地点小学生体验発掘（北西から）

報 告 書 抄 錄

さいたま市内遺跡発掘調査報告書 第18集

南中丸下高井遺跡（遺跡範囲確認調査・第2・3次調査）
海老沼遺跡（第2次調査）・真福寺貝塚（K地点・平成29年度調査）

平成31年3月28日 発行

編集 生涯学習部文化財保護課

発行 さいたま市教育委員会

埼玉県さいたま市浦和区常盤6丁目4番4号

TEL 048-829-1724
